

增補雅言集覽

五十三

813.6
I 619g
Nxs



813.6
I 619g
Nw



691369

增補雅言集覽卷之五十二

石川雅望集

中島廣足 補

○惠の部

〔惠〕會(源藤裏葉)三 けふのみれりのるをもとづねおせさばつとをゆるし給ひてよや
(榮音樂)二 さだれ_トの御堂のるよろづのみあーつくさせつれど(同)三 かの法此
會の日のえまるるまどぬれば(古)別 離うりんるんのみこ此舍利會は山よのせりてり
へりけるよ云々遍昭

〔給〕繪(狹)三、上。今姫君 **〔給〕**さげは_二書_一の心どもなめりともゆるよぞさはわがよみいで
給へるなりなり三十一文字とよ知り給を_二何_一よかは扇のるれうさよまんとい
おせよるらんとをり_一きよ(源夕顔)五 十もみぢやうく色づくせどるより死さ
るやうよおもろきをみ_二さ_一して(更科日記)八 一とみといふ所の山をよくか死
さらん屏風をさてならべたらんやうなり(万)廿七「我つまもるより死とらんいづ
まゆりたびゆくあれいみつ_一いぬさん

○ **〔る〕**く(伊勢物)九 十 **〔る〕**く人なりければかきよやれりなるを

〔魚〕餌(拾)物名す「そ一たか此をさゑよせんとかまへたるおしあゆがはかねむみと
けみ王」
るべく

〔院〕〔るようらん〕院融(公任集)詞書るよう院の石山はおそしませよ殿上人うきそいと
いふ所よいきてかへるとて

〔恵方〕〔るろ〕恵方(蜻蛉日記)中いよれことなりてんけのるろよもまさらんなどわら
ふくいへば

〔穢土〕〔るど〕穢土(平家物)一ノるどをいとひおやう土をねがんとふりくおもひのたまふ
こそ

〔糞〕〔るど〕糞(宇治拾)二、四條の死たある小路はるどをまるこの尻はぐいたるものちちら
いたればたゞ墨のやうよくろきるどをひまもかくもるくといちらいたればけそ
などもきたかがりて其小路をるどの小路と付たりける云々(同)二、十七此少將の上
鳥の飛て通りけるがるどをうけけるを晴明さどみて

〔屠兒〕〔るどり〕屠兒(和名)二、人倫部屠兒惠止楊氏漢語抄云屠兒屠牛馬肉取鷹雞餌之義
也とありか、れと牛馬の肉をとづからもくふものよぞありける今昔物語は此持來
たるものをくふを見れば牛馬の肉なりけり僧これをみるよあやしき所よも來よけ

るうか我の餌取の家よ來よなりとおもひてといへるを見てるべし契沖云俗は穢
多とりれてるたと云ふも此惠止利を訛りて終は俗字を作れるるるべし閑田耕筆よ
云橋本氏話よ三條橋東穢多ノ注諸説屠者の居所をあまべといふの餘戸の畧語なる
べし和名抄諸國の郷名の下は餘戸といふものあり今いふ出村のことよて屠者此出
村よ居たればやがて此名を負るよやとぞ今刻の和名抄餘戸は假字を付されば國
訓よ何とよむことをあらぬ人多しあまりべとよむべしとぞ松落葉よ云餌取今の世
よるたといふのこのるどりをあやまざるなるべし

〔源〕〔るりふかう〕源(源行幸)廿御てのむりしたありしをいとわりあうりみるりふり
うつようりたうか死給へり(狹)三、上云々哥をやがてあふぎのひまもかくりきなさ
れたるもトやうるりふりうわらおられたるかと

〔狗〕〔るぬ〕狗(五十音義訣)四、篤胤云伊奴惠奴の事契沖よりして宇斯たちみな二十
卷の和名抄は兼名苑云犬一名彪爾雅集注云狗犬子也和名惠沼又與犬同とあるを諸
書は犬狗共し伊奴とのみ訓るの合せて思ひ惑れ今も人とな此事は惑へれと彼五
卷の本よの兼名苑云犬狗之有懸蹄一名獠犬多毛也亦作彪伊奴爾雅注云狗犬子也守
禦畜也和名惠沼又與犬同とあり漢籍説文よ犬を彪よ作りて狗之有懸蹄也象形、孔

子曰視犬之字如畫狗也と見え繫傳疏足趾也高象犬之長體垂耳也と云ひ曲禮注分而言之大曰犬小曰狗若通而言之狗犬通名爾雅狗字の注狗子未生鞞毛者と云へま此の普通の故非並立て伊奴と云なれと犬子のいまた鞞毛なきを惠奴といふ乃今も惠沼古呂といふめり宇斯たち元より今いふ五卷の和名抄を見られ糸は然る惑ひも有べきを春海の其本を見とりと云ふ二十卷の本然る缺文ある事を知らでな不惑へるの如何よぞや

ある一説源梅のえ四心葉こんるりの五葉れ枝のろきの梅をありておかトくひさむすびる糸のさまも云々(花鳥)心葉の松も梅も打枝のやうのカ子ニテエリタルリ

あわらひ(狹)一下めのとれ心ゆきてものいひあらひなさずるときくよねさうりなしとも(枕)九立るふるまふさまなどつまけならせ物いひあらふいつの世より云々

ありう回向(源わかな下九おがしてつともさりがされ御あかうの内のまづこそのとあそれよかんなさ(觀經)末二三者廻向發願心注廻所修行向行求處あそらとと(著聞)十一ありのまれ此寸法よかさて候の見所をあらわす候ゆゑよ

あそらとと、の申ことよて候

あつがの會(明月記)嘉祿三年六月廿三日云々満座大悦以下先々咲壺云々

あつがよ入(宇治拾)十四をろよあつがよ入よれり云々あつがよ入たるものども

物をたよえいとて入道よ向て手をすりければ(保元物)新院母屋の御簾を綻さし觀覧あり龍顔すこぶるあつがよ入りおそしまれ(宇治拾)さふらあふ物どもあつがよ入てとらひのしりければ

あつがの會(盛衰)十僧も俗もあつがの會よてのありけり

あらく(貞觀儀式)九答鼓擊惠良幾天

あむ心(源帶木)廿君すこしかたあみてさることのおがれべりめり(同)一打もあまれ涙もささくみ(同桐壺)二いみトきものふあたりたれなりともみてのうちあまれぬべきさま給へれば(榮初花)十おまへ候人々もあましう見奉るよ(源行幸)卅あみ給ひぬべきをねんトて(同夕霧)四十あましきりれ此句ひよて少將の君をとりと記てめしよれ補(同藤の裏葉)十うちあみて手をいみトくもかきあられけるりかなさのたまふも

補あん(瀆松)上月くまなくさし入てたれま記あけてれいの事なればうるとし

きそがたよてゑんとおぞしきりよはおりて二三人ある中よ

ゑんがのみこ(源 寄生)七十九ゑんがのみこたち上達部大饗よおとらせ(同 竹川)四十

たいきやうのゑがれきんたちなどあまたつとひ給ふ(同 句宮)十六七ゑんがのみこたち上

達部の御座あり補(後撰)一雜齋院のみそぎの垣下よ殿上の人々まりりて云々右衛門

(うつろ祭の使)十うへおどろけ給ひてくら人奉り給ふべきよゑりよまるれとお

せせらむつればなどの給ふ

ゑんと怨(空穂 國護)中一あやうはりり事よて此月比ゑんと給ひて(源 帚木)三

かたむなるべきもこそとゆるし給ねば云々おのりト、うらめしき折々待が不あ

らん夕ぐれなどのこそ見所あらめとゑむせれば(同)十八例のそらたちゑんせりよ

(同)十四ゑんせべき事をバ見られるさまよのめり補(源 蓬生)九やむことなく

も思きこえ給とぞゑんとうけびけり(同 紅梅)十うへこれをバすさめたりとけ

しきどりゑんと給しこそをりりりり

〇ゑト(空穂 國護)中一年月へたてゝゑトたまふべきこととおぞえぬを人のそら

とといふよつてやと(同)十五ある時のあそれよ心ぐるしけよある時のよくけよ

ゑト給ふ(同 樓の上)十五いと心うくたふれよく、かゝる事の仰らるべしやへと

てゑトきこえ給へ(源 朝の暁)十よろし記ことこそ打ゑトおどよくからせ聞給へ

補ゑうく(宇治拾)十六大なる骨喉よたてゝゑうくといひけるをよ

ゑぐ(万)十七「君がため山田此澤よゑぐつむとゆきけの水よものをぬれぬ(後)上春

よみ人「きみがため山田の澤よゑぐつむとぬれよ袖のいまもかこりせ〇千蔭云

東國よてよとといひ土佐人のゑぐといへり葉の藺よ似てちひさく根の白く小き芋

ありて味をこゝゑぐ俗よ黒くこゑといふもの、類也〇或云芋也(八雲)芹の一名

也又若菜の小さきをもいへりと有(詞花)春(好忠集)「雪きえゑゑぐのこりなもつむ

べきよ春さへそれぬと山べの里(忠度集)「雪よけてゑぐれこか菜も生よけりけふ

のためといりりけん(夫木)春一後徳大寺「うらこりみつめとたまらぬゑぐ

の葉をかたみよのみもおせつるりか(同)同般富門院大輔「賤の女がゑぐの若菜のおひ

ぬとやとそのおもあせつたひ行〇武藏足立郡わたりの諺よ晝ゑぐつむで夜田

をうつといへり補(山家)下「澤もとけせつめとらたみよとよまらめよもたまら

ぬゑぐのくさよき(同)下「とーのや月をみかけてこえよけりうべつみけらゝゑ

ぐれこりたち(詞花)雜下「ゑづのめりゑぐつむ澤のうれをりいつまでふべきと

が身かるらむ(續後拾)戀二衣笠「いりよせん山澤ゑぐもつまなくよ衣手ぬれて戀

つゝぞふる(万代)春上「いざやこらゆき消ぬらゝ足引の山澤をぐも摘てかへらん

(和訓栞)万葉集ふ惠具と書り野菜の名也エケ醜き義成べー云々顯昭説花のそまお

咲て水邊あり芹あり似たる草也といへり云々

ゑやう(源胡蝶)三とびちがふをー此波のあやもんをまどへたるおと物のゑやう

よもかきとらまほしき同梅かえ十物のあさりたるゑやうかどをも御覧といれつゝ

(枕)六つくも所の別當をる頃たれがもとよやりけるよりあらん物のゑやうやると

てこれがやうよ仕るべーとかきたるまんなのやうもトの世よーらあやしきをみ

つけて

補 ゑまそしき(万)十八「あぶら火此ひかりよ見ゆるこりかづらさゆりの花のゑ

まそしきりも

ゑまる(源すま)四十いみトウみるよゑまれてきよらなり

ゑましう(榮初花)八おまへよさふらふ人々もゑましう見奉るよ同さまく三四

の宮云々攝政殿云々いとうつくしう見奉らせ給ひて打ゑませ給へるやとせむろよ

見奉る人いとゑましう思ひ奉るべー同玉の臺九物なごくひてうちふはとてもた

た此御堂のことをいひてゑましううれしきものよおもへり同御賀四侍従大納言

いみトウか死給へらんもせむろよゑましうおもひやらる

ゑましく(源藤裏葉)みるよゑましく世中をるゝこゝち給ふ

ゑましき(源タきり)四十ゑましき顔の匂ひよて少將のきみをとり死てめしよは

(榮見はてぬ夢)十女御の御心さまもとなやうよいまめりしうゑましき御ありさま

なり

ゑまひ(夫)四仲實朝臣「春くれと野べの霞よつゝまれて花のゑまひのくちびるもみせ

補(万)四「おもそぬよ妹がゑまひをいめよみて心の中よもえつゝぞをる同七

十五おもひやこりて惠麻比つゝわたるあひたよ同十八「かそーこが花みるごと

よをどめらがゑまひのよほひおもゆるりも

ゑふ(醉空穂俊蔭)七十こがぬしをゑそし奉るもこゝろありや(催馬樂 酒飲 酒をた

うべてたべ惠宇天(源梅枝)五御使とめさせ給ひていたうゑそし給ふ

ゑふ(衛府伊勢物)八十此男かまみやづりへしねればそれをたよりよてゑふの花け

ども集り死よけり此男のこのりみもゑふれかまかりけり(平家)一北面上古

はかりけり白川の御時をトめておうれてよりこのりたゑふどもあまたさふらひ

けり

ゑぶくろ 餌袋 (宇治拾) 八〇 獵師聖ノモト ゑぶくろよ布いひなどいれてまうでた

り(落窪) 一かよもあらん物給へといひよやりたればゑぶくろふたつてをりいさ

さまよいていれたり今ひとつの大きやりなるよはさまよのくたものいろくの

もちひうそ死こさいれてかみへたて、やいごめいれて(蜻蛉日記)中こよて御わ

りでまちつけん云々をさな人ひとりつりれたる顔よてよりるたればゑぶくろを

るものとり出てくひかどまるよどよわりをもて死ねればさまよわちあどて

(空穂 俊蔭) 五十 布いひたゞまこゝゑぶくろよ入ていどいのびておそまは(元

輔集) 梨壺よて云々 ゑ袋よ物いれて藤の花してゆひてやまよもちらして侍りよ

(枕) 廿一 つねくゝいさをのこささうぞくをりうゑるゑぶくろいたりせて(注)

ニ鷹ノ餌袋見ゴトニカザリシタル也鷹ナドスエサセテ來ルサマナルベシ〇ゑ袋ハ

鷹のゑぶくろあるを後へくひものいる、物よもあづけたり(金葉) 雑男心かそり

てまうでこ中成よける後おきたりけるゑぶくろをとりよおこせたりければり死つ

けてつりいける 櫻井尼 「の死をうつましろのたりれゑぶくろよを死ゑもさ、で

かへいつるりな(うつ布 櫻の上) 上ノ二こがねのまきゑぶくろよいれて(著聞) 廿九

そのをしをやがてそこよてとりりひてえからをばゑぶくろよいれて家よかへりぬ

云々 ゑぶくろよをのめどりのもらをおのがもよてつきつらぬ死て死よてあり

けり(うつ布 櫻の上) 三、ゑぶくろよ御くたものいれたり

補 ゑびひ 餌乞 (順集) ゑびひをる君がもよさうゑたがれの野よかまなちそもやく

手よすゑ ゑもトを沓冠 又したる哥也

補 ゑさやう 惠慶 (兼盛集) 世中うらみける比ゑさやうが許よいひやる

ゑみ (新六) 五、衣笠 内大臣 「かよをを思ひけりともゑられトなゑとのうちよも刀やいな

き(万) 九、花のこと 咲而たてれば

ゑと顔 (源 あふひ) 卅四 卅 けよ何心を御ゑと顔ぞいみどううつくよ

ゑみぐち (源 柏木) 卅 〇 カナル 此君のいとあてなるよそへてあいさやうづきまみの

かをりてゑみぐちあるかとを

ゑみのまゆ 笑の (源 ヲかは) 二夕顔 白きもかぞおのれひとりゑみ此まゆひらけたる

(和名) 十七 罇發 惠女 栗皮垢罇而發也

ゑみまけて (源 すゑつむ) 十 かく世よめづらよき御けもひのもりよほひくるをばな

ま女さらかともゑみまけて(おちくる) 三 いとかなしうらうたくおぞえてゑみまけ

てこちよとの給へば(榮 楚王夢) 一あやのゑづれをさへゑみまけうれよけよお

もひたるさま(万)十九長哥不そきまゆねを咲麻我理オミガリ○笑曲ニテ眉ノタワメル形ヲ
 イフレナリニ通ハシテゑみまがりトイヘルカゑみまけの笑設ケ也(發心集)三ノ耳
 もとまでゑみまけて備(宇治拾)三ノ女ゑみまけてみて子どもいふやう(住吉物)
 少將殿の御ふみとてまゝとまゝたてまつればゑみまけてうつくしくもか死給へる
 ものりか(今昔)繼母よりくといひりばゑみまけてぞゐたりける(落窪)一いみど
 とおもひて口の耳もとまでゑみまけてゐたり(宇治拾)九ノ講師ゑみまけてよーと
 おもひたり

ゑみこたれ(宇治拾)一横坐の鬼盃を左の手もちてゑみこたれたるさま

ゑみこたれ(枕)八ノこいたそとへゑみ聲おなりていみどきこと聞えん

ゑみさりえ(源)あふひ九手をつくりて額にあてつゝ見奉りあけたるもをこがま

けなる賤の男までおのが顔のからんさまをばたらでゑみさりえたり(同)總角五十

女をらひころうちつおやきつるかこりなくゑみさりえつゝ(同)末つむ四雪比ひり

りよいとゞきよらよわりう見え給ふを老人どもゑみさりえて見奉る

ゑみく(今物語)ゑみくゝとこらひて備(著聞)十六おそろけなるらぐのうを

まゐりたりけり云々ゑみくゝとていりよおそろく思召候らんかと申て(同)十七

十ちりづきたるをみれば光の中よとよりたる姥のゑみくゝとてたるかたちをあ
 らそして

ゑみひろこり(源)寄生七十御聲のあてよをくゝきを女をら物のうしろちりづ死

まゐりてゑみひろこりてゐたり(とり)うへ(そや)一三といみどくおせしてゑみひ

ろこりて今まで御いのりかともせざりけること

ゑみとせこ(空穂)初秋一ノ兵部卿の宮よ御覽くらべてけよのゑみとせこして

あるまどき人の中よこそいありけれ

ゑい(源)桐つは七畫よかける楊貴妃のりたちのいみどきゑいといへども筆限

りありければいと句ひあり(同)わかし二十畫よりゝ心のいたりすくあからんゑい

いかにおよぶまどとせゆ

ゑい(衛士)拾員廿一ゑい此さくけふりさりりいさもあらばあれ雲の月此秋らせ

のそら(榮)花山四あやいのゑいちちやうよいたるまで(詞花)戀上能宣「みりきもり衛

士此たぐ火のよるいもえひるいさえつゝ物をこそおもへ(中務集)「そり死よりゑ

いのたぐ火よあらねどもこれ心のうちよこそたけ(令義解)五十凡理門至夜燃火

謂内及中外三門
 皆衛士燃火也

ゑーやく(瀧松)廿三人の心惜かくゑーやくそくなれ所も(盛衰)十二院宣の御使よ
て様々ゑーやく申ければ

ゑひ醉 酔ゑひ (源 あかし)廿御使まをゆきまでゑひ(同 藤末葉)七みたりがそー
くゑひゑそー給ふを補空穂樓の上六十よきやどゑゑそー給ひて云物もおやえせ
ゑはー給へり

ゑひよなりて(源 行幸)十かそらけあまさゝびかぐれみか酔よなりて補同(藤末葉)
廿みな御ゑひよなりてくれのゝるやどよぐく所の人めは

ゑひよのりて(後)雜詞云々まらうとあるト酒あまさゝびの後ゑひよのりて子さも
のうへかど申けるついでよ七條のきさき

ゑひかやむ(源 花の宴)十源氏の君いたうゑひかやめるさまよもてなーさまひてま
たれさち給ひぬ

ゑひなき醉泣 (万)三ノ讚酒哥「もたをりてさうーらるゝ酒のみて酔か死するよ
廿二
なすーらせけり(同)同「よのかり此あそびのみちよさふーくゝゑひなきをるよあ
りぬべからー(同)三ノ「かーこーとものいふよりの酒のみてゑひな死をるーまさ
りたるらー(源 行幸)九十六條殿もゑひあきよやうちー不ざれ給(同 松風)廿物哀ある

ゑひなきともあるべー(續後紀)十三文室朝臣秋津卒云々亦論武藝足稱驍將但在飲
酒席似非丈夫每至酒三四杯必有醉泣之癖故也(源 わかあ)上ノみこもゑひなきえと
どめ給て補同七物のおもーろさもどぐこりなく御ゑひなきどもえとどめ給
そぞ(同 藤末葉)七ゑひあきよやをりーさやどよけー死をみ給ふ(大和物)四人々も
よくゑひたるやどよてゑひか死いとよかくせ

ゑひのまどひ(源 若菜)下ノ志さーれゑひのまどひよもあらざりけりやがていと
たく煩ひ給ふ

ゑひのまぎれ(源 藤のうらひ)八つたぐー皆せんかがるめれどゑひのまたれよと
りさうーからで是よりまさらせ

ゑひの言(うつ不 藏開)下ノ源侍從こよひの事誰もえとがめ給そト神もどがめ給そ
はや酔のこををさなさいへせ

ゑひくそり(源 松風)廿か不所がらのをささへへそへたる物の音をめでゝまたゑ
ひくそりぬ

ゑひこどよ(抄)言也土佐日記上とかくいひてさ死の守今のもろともよおりて今
のあるトもさ死のもてとりかはしてゑひこどよ心よけある事して出よけり

あひて、ち(源花の宴)四あひて、ちみまぐらぐたくおせ給ひければ

あひさまたれ(散木)人々あひさまたれてまゐる、を見て(兼盛集)「つまつた

もかくてこと、のかぎさ、つあひさまたれてけふのかへりぬ

あひーれ(源少女)十大將さうづたさ、給へばいたうあひーれてをるかやつき

あひまぐ(源あふひ)六こりきものどもあひまぎ立さ、たたるそとの事、

あひす、む(源帝木)八あひす、みてあ(同藤裏葉)九翁いたくあひす、みてむらい

かれは

○比の部

ひ(古)上秋あぬりの日、夜よめる凡河内(同)同なぬりの夜、曉よよめる源宗干(同)

同やうりの日よめる壬生忠峯(源蜻蛉)十御葬送の事、云々日定められて(同)十かゝる

ところ、日をかぎりてこもりたればなん(同)同日をのべてもさる事、するものを

あ(源帝木)八あかくら、として火か、けなごせべ(同)九木丁のさうと口よたて

て火のそくら、見給へば(榮月の宴)九親とも君とも宮をこそたのみ申つるよ

ひをうちけちたるやうなるをあそれ、おせ、まどふ(源薄雲)十とも、火などの消

いるやうよて、給ひぬればいふ、ひかくあ(空穗あて宮)廿火をつけてかた時よ

や、たろぞ、して(紫日記)火ととおもへどさよ、あら、火事カト(拾愚)下かけ

をりり見てかへりける道よて火のあるよ、人のいふよ「こひ、てあふともあ、

よもえまさる胸のけふりや空よ見ゆらん

あ(古)物名「心から花の、くよそぞちつ、うぐひそとのみ鳥のなくらん(万)

五、我なくか、たいまたひなくよ(源わの紫)六ひがさう侍るものをときこえ、まふ

あ(同あかし)七「かへりて、うとやせま、よせたり、かぞり、神のひがたかり

あ(新古)秋下「むらさめ、れつゆもまたひぬ、槇の葉よきり、たちのする秋のゆふ

暮(同)春上「み、まえや霜もまたひぬ、芦のよ、つれぐむ、そとの春風ぞふく

あ(ひる)源みのり)八ふ、てもおきても涙のひるよあ、(同あふひ)九な、たまもろあ

るわざよ侍るをま、してひるよなうおもひ給へま、どのれ侍る(古)三、ふ「みつ、そ

のかぐれひるまをあひがたみ、るめ、れうらよよるをこそまて(土佐日記)川のみづ

ひてなやみ、こづらふ(神代紀)下ノ潮自涸

あ(水)万)十三、長哥おく、も、氷よさえ、たたりふる雪もこぞり、たたりぬ

あ(源の公霧)初初よりけさうびても聞え給、のざり、引りへ、けさうをみあまめ

らんもまさゆ、あ(同末摘)廿ひなびふるめり、うこと、く(瀧松)三よのつね

びうたてけれバ○ひなびひの部ことさらびこのるなりびぬの部おたなびぬの部おたなびぬの部おとなびぬの部

補ひいづる秀(古言梯)穂出ハイツルの轉也

ひろ尋(源 總角)七あけまをたふれよとりなり、も心もてひろをかりのへたて
よても對面一つるとや此君もおぞらんといみどろもづりけれバ(催馬樂)總角
あけまきやたうく、ひろをりやたうく、さかりてねたれどもまろびあひまけり
たうく、かよりあひまけりたうく

ひろらり(宇治拾)七ノすいあゆのおせく、まひろらりなるが

ひろむめ(源 繪合)二つひよ人のみりまもわが國よもありがたれさえのそを
ひろめ名をのこしけるふりたこ、ろをいふ(同 松風)九をこがましき名をひろめ

(續紀)廿五、先祖名乃名乎興繼比呂米不念阿流不在武止

ひろく(源 桐つは)卅池の心ひろくをさして

ひろぐる(狭)四下見所ある繪さゆりけれバかたまづ、ひろぐるをさよ

ひろやり(更科日記)三かたつたのひろやりある所のすかをさるく、と白き云々

ひろまへ(文德實錄)二天御柱國御柱神乃廣前爾申賜倍申久止

ひろまる(御堂蘭白集)「あなたふどのり此ひろまる君が代のかたまりをたまでおも
ゆるり(古)序 奈良の御時よりぞひろまりよける

ひろけ(源 加紫)八髪ハ扇をひろけたるやう(榮 哥合)十六ふたあひのうつくしき
とりてひろけしくを見れば(源 空蟬)七風ふきとせとてた、みひろけてふ(同 空蟬)七火あきかたし屏

風をひろけて(補 著聞)五、四此御ふみまらせ候そんといひてさしおきたるをひろ
けて見れば

ひろふ(万)六ノひろひてゆかん戀とすれ貝(源 帶木)廿をらバおちぬべき萩のつゆ
ひろまきえかんと見ゆる玉さ、のうへのあられ(同 行幸)三さまと、まか、るな

のりする人をいとふことかくひろひあつめらる、(同 椎か本)卅たれこのみひ
ろひて參る山人とも有(古)物名、は「浪のうつせみれ玉ぞみたれけるひろま袖

よまかかからんや(補 万)十八「たましくけいつりあけむふせれうみのうらをゆ
れつ、たまも比利波牟(同)十五、一家づとよ貝を比里布とおきべよりよせくる波よ

ころもでぬれぬ

ひろぶた(長門平家)五ノ御衣十二領ひろぶたよ入てまられさり(補 園大曆)白重

の日記 延徳二年 一品の禪尼の御局よりいときよけなるまにえ此ひろぶさよおり物のきぬ一領おきて

ひろこる(枕)一柳なき云々それもまた眉よこもりたるこそをりしけれひろこるのよく(同)三ノそのうき葉の云々 大きあるとちひされとひろこりたゞよひてあり(源 桐つは)二廿おのづから事ひろこりてもらさせ給えねと春宮のおちおとどかといりあることよりとおち疑ひてなんありける(同 松風)四廿ふみひろこりかからあれど(同 篝火)三けしきことよひろこりふいたるまゆみの木れいた(同 稚の本)卅世よいたうき給へる御名のひろこりて(同 手あらひ)三白きものひろこりたるを見ゆる

ひろさ(伊勢物)八十其瀧物よりことなりながさ二十丈ひろさ五丈さりりなる

ひろき心(源をどめ)六何事もひろきこゝろをいらぬぞどの文才まねぶよもこと笛のちらべよもねたらはおよさぬ所のおおくなん侍りける

ひろきもちひ(枕)四ノくたもの廣きもちひかどをものよどりいれてとらせたるよひろめりを(空穂 磯開)中十六もてきて宮の御文とさへけてひろめり源中納言こゝろあらん御文をかうしてあしりめりや(榮 初花)八いろくさまとよてあり

きあふぎをひろめりしつりひて
ひろめく(枕)二まづ扇してちりせらひすてゝるも定まらむひろめきてねりぎぬのまへおもさまよまくり入てもるる(同)二ノいときをやりよおきてひろめれたちてさしぬきのこしつよくひきゆひな(著聞)廿一くちなさいでゝひろくゝとひろめきてやがて死ぬ

ひろ(源わか紫)四十年比よりもこよあうあれまさりひろう物ふりたる所のいたう人ぞくおまさびしけれバ(万)廿九君しかよま道ひろけん(源 帯木)九かみひしもよたせけられおもひかみよなびきて事ひろきよゆづらふらん(同 幻)十ものあそれも故ある事もかき筋もひろうおもひめぐらぬ
ひろ(源 玉高)九廿御門引入るよりけしひことよひろとよとしてまろで参る車おやくまよふ

ひろひたて(空穂 祭の使)七をりしき故瓶とも水よひろひたてかどして(同)廿かあるいとなどひろひたてたるなりより云々

補(ひそ 鶺鴒)(枕)八くひな、若ぎ、みことり、ひそ、ひたれ、(山家)下「こゑせはと色こくかるとおももまゝ柳のめをむひそむら鳥

【補】ひさりの床 (詞花) 冬 好忠 「久木おふるささべのちをら冬くれバひさり此床ぞあらされまける

ひまた色 (源 手習) 廿 せりまもひまた色はならひたるよや (花) ひまた色はおもて蘇芳よくろみありうら花田也 (河) スハウトフシガ子ニテ染名物也出家ノ人多分用之

【補】ひまたや (枕) 五 あさらしくもかくていさくふりてもなきひまたやよ 云々 (源野分) 九 ひまた瓦所々のたてととみ (月清) 一 「故郷の軒はひまた草あれてあそれきつねのふいどころりあ (職人哥合) 「軒づけをまづふれをむるひまたやのまたむねあそぬ戀もするりあ

【補】ひまたおき (枕) 十 ふるものい、雪のひまたおれいとめでたー (うつろ 樓の上) 二 下ノ六十 ころうのうへまひまたをばふりて (職人盡哥合) 「月のもるの死を此きりのうはひまたふきもとそさぬ秋の風かな (榮日 蔭) 十 そのくるまのありさまいへばおろりなりあるのやりたをつくりてひまたおれ (同 本の 車) 卅 三けん四めんのひまたおれの御たういとさゝやりまをりけまつくらせ給ひて (同 衣の 珠) 廿 四 このやまことーひまたをふりぞかりぬることのくちをーさ

【補】ひまつ (宇治拾) 十 尾形の上ま甘さりりよてひまつがる僧の經袋くびまかけて

ひさう 誹謗 (枕) 二ノ云々 十九 此比其をりさー出たる人の命なぐくて見まーりいりさりりひさうせまー

ひそやう (榮 音楽) 八 宮いみとうひそやうよめでたうていらせ給

【補】ひそぎ (宇治拾) 二 ひそぎありて人ころいやとをめく (同) 十四 御房ひそぎまあいせ給ひたり (著聞) 二十 邊土よてひひきそ死をーてすぎ候ひつるあり (宇治拾) 廿三 ひそぎよさふらふといへば

【補】ひそー 火箸 (枕) 四 冬火桶よもやをらたつる火箸の音も忍びたれと聞ゆるを

【補】日よそへて (源 わかな) 下 十五 日よそへてよこり給ふさまよのみ、ゆれば (續千) 釋教 法皇御製 「日よそへてかけのりそれぞ大空れつきひひとつぞをみまさりける

【補】(新拾) 春下、二條 院讚岐 「ひよそへて立ぞかさなるみよーの、吉野此山の花れーら雲 (後拾) 戀 三 (和泉式部集) 「ひよそへてうたことのももまさるりかくれていりであけ

せもあらなん (顯輔卿集) 「日よそへてありくぞみゆるかゞみ山紅葉のいろやふりく成らん (新千) 戀 三 八條院高倉 「日よそへておもひぞーなる大あらさけ浮田の杜やこ

が身なるらん (續古) 雜 中 (万代) 戀 六 眞慶 「ひよそへて泪のつゆれおけ、ればあたる玉をこそよけれ (續古) 戀 五 俊惠 「日よそへて霜がれゆけば葛れそのありーそりりも

のをぞよこりゆく (万代) 戀 五 俊惠 「日よそへて霜がれゆけば葛れそのありーそりりも

えこそうらみね(新拾) 維中「日よそへて位の高くなりゆけは山此りひある君とこそ
 みれ(新後拾) 春下一品「日よそへて雲こそかゝれりづらきやたりまの花のそやさ
 りりりも(同) 秋下欣子「ひよそへていろこそまされきのふよりけふのいぐるみ
 ねのもみぢを(同) 戀五「つもり行うらとむりひぞかりける月日よそへてつら
 契(万代) 戀三「日よそへておけれいとゞおふねのゆたかりけるこが涙り
 か(上東門院菊合)「ひよそへてうつろひまさる菊は花いくよのいもどふるよりあ
 るらん

補 ひよそひて

(拾員) 新葉陰

ぞそくあき○此詞をひの所よ出

ひよん

非人。罪人。

(續後紀) 十二 罪人橘逸勢除本姓賜非人姓流伊豆國(同) 十九 有勅

賜非人逸勢男龍劔實山等本姓聽入京(今昔物) 一釋迦如來丈六の姿紫磨黄金の光を
 放虚空より飛來り給ひて此獄門をふみやぶりて入給て利房を取て奪給ひぬ云々を
 のついでに此獄にいまいめられさるおふくの非人かくの如き獄のやぶれぬる時よ
 皆心よ隨て方々よ逃去ぬ

補 日よけよ

(万) 十五

「わがやどのくせむひよけよいろづきぬ來まさぬ君が何こ

ころそも

補 日よ日よ

(万) 十七

「山ぶきのひよくさきぬうるむとあがもふ君のそくを
 くおもすゆ(瀆松) 下 ひよくものを引のおるやうよて兒の出生 (万) 廿三 「家風の

ひよひよふけどとせもこがいへてどもちてくる人もあ

補 ひよもみづよも

火ニモ (中務集)

「よとよもよもよたれつゝさがためよ火よ

も水よもいれるころぞ

ひやー(拾)

物名す「雲まよひやー此あゆくととえつるは螢のそらよとぶよぞあり

ける(和名)炒焦和名比保之乃火乾也

ひへぎ

引倍 (榮 駒くらへ) 四御志たがさねのきく此ひへぎ(同) 音樂 五を

が中よもくれなるなでこのひきへたなごのかやれにたるよまきちかうをみなへ

いとたぐちさくさ

此かうかどのおり物(飭抄) 引倍 木下襲

ひと

(うつつ) 藏開 上 五 宮これの入りか

の君のいとみどきものを

○とつ人(万)

十七 十八

「けされあさけ秋風寒いとつ人鴈がきかかん時ちりみりも

○かさらひ人(源 末摘 四

琴をぞかつりさかたらひ人とおもひ給へる

○み一人(源 わのな 下

いづら此見一人のと尋ねてみつけたまへり

○もとの人(万)廿一「もとの人」といふを止めづらく今やながくるこひつゝをれば

ひとい 一寐(貫之集)上ノ「かぐさめてひといたはねん月かけは山平といぎれを死てゆりなん

ひといへ 一家(宇治拾)十ひといへ泣のゝしるよ

ひといぬ 人犬(空穂國讓)上四。犬宮ノ「チあかりしこや人いぬなさいふおそろしきつものありくかり外よていあらせこゝよていとさがなりらんと給へば

ひといた死 一擁(宇治拾)九川上より頭一いざ死をりかる大蛇の目のかなまりを入たるやうよて

補 人のいざ(古)春上「人のいざ心もあらせ故郷のそなぞむりし此香よ匂ひける

(後)戀二おほつふね「人のいざわれのな死名のをいければ昔も今もいらせとをいせん

(同)戀五大輔「人のいざみやまぐくれのそとゝぎれならそぬ里のすまうりるべし(千載)戀三頼政「人のいざありぬよどこよとゞめつるわがこゝろこそ我をまつらめ(顯季卿集)「人のいざふまゝくをい死雪をれとたづねてとふらうれいきものを(金葉)戀下よみ八しらす「人のいざありもやをらんをせられてとそれぬ身こそを死こゝちを

れ(和泉式部續集)「人のいざわがたまひひのそりもあははひのゆめぢはあくがれよけり(拾玉)五「人のいざこがむやとの雪れうちは心よとそむおもひりなん

(万代)雜一實方「人のいざ心もいらせたつきとのりり此このよはあをいせりぞ(隆信集)「人のいざまこと此みちよこれいらはきみよぞまづいつけむとおもひ

以の部 いさノ處にも出す

補 人をへせるもの(枕)八、人をへせる物云々○春曙抄云人をへと世俗よいふ詞なり人映と書廣足云人映と書からば假字もせえと書べし此意の枕のをちよよて

あるべし

ひととる 一春(續拾)雜春定家「花の色の一とるさけと歸る雁ことし越路のそらたれめ

ひととた(宇治拾)三湯おねは藁をこまゝと死りて一とたいれてそれが上は筵を

い死てありさまそりていさうかくゆどのへ行て云々(發心集)八文のされちひさき

唐櫃よひととたよぞ成よける(宇治拾)三ノ七八のひさでよせんとおもひて内よつりつねてお死たり云々とりおろして口あけんととるよそこいおもいあやいけれども死りあけてみれば物ひととた入りたり何よりあらんとてうつりてみれば白米の入

たるなり

ひとまた 人肌(狹)三下此猫のまばらあづけさせ給へり人またはつくるよりのと

の給ふを宣旨といふ人打笑ひて今さへいなでふ人またを尋させ給ふと云々

ひととね (夫)廿七「ひととねは千里をかける鳥もなをゆさかよとをゆく末の空

(同)廿七季經「ひととねはちさとをかける鳥をれを君がよそひの末の極め下

ひととあ 一花(夫)十六「霜さゆるあいたの原に霜がれはひととなさけるやまとな

でこ (同)爲家「霜がれの草はまけみよかくろへて一となのこるをみかへるかあ

ひととなれ (新六)三(夫)廿二信實「あぎさるるあさゝをのゝ人をかれさびく遠死

水の上りか (源若紫)五ふり死さとい人をかれ心すてく (同)浮舟七十人とかれさる

御まひよて

ひと花ころも (源末摘)卅「くれなるれひと花衣うれくともひとをらくたはかを

たてせバ

ひととなせり (夫)十一家隆「そつ萩の一をせりれ旅衣つゆおきをむるみやぎのゝ原

人むえ (枕)八人むえするもの云々

ひととら (持統紀)八獻金銅阿彌陀像金銅觀世音菩薩像大勢至菩薩像各一軀綵帛

錦綾

人よぬ (源寄生)四十まめやうよ哀なる御ころをへの人よ似せ物し給ふをみる

よつけて

人よとなく (源總角)廿八人よとなくて生いでさせ給ふめれば (同)四十かく山ふか死

御あたりなれば人よとなく物ふりくてならひ給へるこちよ

人よかる (源タキ)五十年比人よたがへる心させ人よかりてさまゝ情をみえ奉

るなぞりなくうちたゆめ死をさやうかるがいとほしう云々

人よく (源あけまさ)卅あさましかりける御心づよさを聞あらそいでいとあまり

ふりく人よくかりけることいと多くおもれるたり (蜻蛉日記)上かくて人よ

くからぬさまよて十といひて一つふさつの年のあまりよけり (六帖)六「をいめど

も花の散らん人よく物もいとぞみるべりりける (源東や)廿さるやうこそ侍

らめ人よくそしたなくもかの給させ (同)葵四さるなれさまかり御返りかど

もをさくなくさりとて人よくそしたなくもてか給せぬ御けいさかな (古)

戀三よみ「こりせまよ又もう死名は立ぬべし人よくからぬ世よをまへ (源

常夏)七云々 けたり死やうとて人よく心うつくうのあらぬこさなり

ひと、ころ一所(源紅梅)五よるく、のひところは御殿をもり(同葵)八上達部のい

とことあるを一所の御光りよ、おしけたれためり(同わかあ)八兵部卿宮なほひと

ところ此みおそして(同幻)九つれづれまがめくらし給て星合みる人もあしまた

夜ふりう一所おき給ひて(同蜻蛉)五さりどてかく覺束なくてのいりゞ歸り侍らん

今一どころたよとせちよひたれば(同夕きり)五いよへも御こゝろよかな

ぬためしおそく侍れ一ところや、世のもときをもおせ給ふべき(同帝木)五例の

人々のいぎたかきよひと、ころすゞろよすさまじくおそいつゞけらるれば(同東

や)十。媒詞守かの御心ざし、たゞひと所の御ゆるし侍らんを終ぐひおそして(同

同権か本)九一所く世よすみつき給よ、があらば○廣足云此詞ひとりく、よ同

(大和物)百四十六段此在次君のひと、ころよぐしてゑりさりける人みりそのくよより

のやるとて二ところ(狭)一上おのづからまぎれたまふよあ、の二ところながら

うちもふさせ給そぞ(同)上一。父母ノさらばいりよ思ひおきつる事のありけるぞ

と一所しておそしまどふさま片時たよいみどけある

ひと、き一時(源松風)十天よ生るゝ人のあやしきみつの道よ歸るらん一時よ思ひ

をせらへてけふながく別れ奉りぬ(古)誹諧「秋のよなまめ死立るをみかへしあ

なりしがましそおも一時(同)序をみかへし一時をくねるよも

人ども(宇治拾)一十六や、久しく物もいとでありければ人ともおそつりかくおもひ

けるぞよ

ひと、せ(源桐つは)六るたちおそしいとなみてかぎりある事よ事をそへ給ふひと

とせの春宮此御元服南殿よてありし儀式のよそそしかりし御ひゞきよおとさせ給

そぞ

ひとちり人近(源帝木)廿その人近うらんなんうれしかるべき女遠き旅ねの物おそ

ろしき心ちなんをべきを

ひとり(榮歌合)十御ひとり持ておそしましてそらた死ものせさせ給て(新六)五行家

「おもふことふところふりきた死ものゝひとりのけふりゆくりたやなき(源権柱)

五ひとりをとりよせて殿のうしろよよりてさといらけたるぞ(同)四ちひさ死火

とりとりよせて袖よ引いれてしめる給へり(源ゆふのは)廿いり給へれば火とりを

むけて右近の屏風へたてゝふりさり(孟)よ源の御出よよりて火をとりのけたるを

りとあるいわろし廣足云此説非

ひとり獨(伊勢物)二獨りのみもあらざりけらし(万)三三「まつち山ゆふこえゆき

ていそざれの隅田がそらよひとりりも終ん補拾戀三人丸「足引の山鳥のをのちたり
 尾のながくよをひとりりも終ん〇月鹿をど其外万物よひとりといふ事多し歌
 の四の句よあるハ万葉類句古今類句にて見るべし風など形なれものよもひとり
 いへり(新古)冬舞政太「月ぞそむたれりいこよまきのくよ吹あけの千鳥ひとり
 かくなり〇みの家づといふ千鳥ハ數おそくむれるものかれびひとりといふ
 こと似つらそしからせ〇尾張の家苞よ云ひとりのをりといふ事詩ハ常あるも
 ト也此殿の歌ハ唐詩をおもひたる多かり〇廣足按ひとりといふ語万葉あるは皆人
 の上よいへり外の物よいへる例ハ(新續古)秋下後京極攝「みよしれ花ハ雲よも
 まがひしをひとりいろづく峯ののみち葉(月清)二「ふもとゆるるせれの水やそ
 るらんひとりおとれるあらし山りな(新千)秋下前關「あとたえてとそれぬ宿のあ
 さぢふよひとりつれなき松むし(拾玉)七「花ざかり霜もいづれも露もな
 ひとりつらきハ春のやま風(後拾)哀傷實方「見むといひし人ハそりなく消しをひと
 り露けき秋のそかりな(拾玉)三「來てみればこがふるさとハあれそてハひとり
 これるかきつそさるな(新古)雜上よみ「山川のいそゆく水もこりしひひとりく
 たくる嶺の松風(拾玉)四「あさみどり春れがめもやどさびてひとりくれぬる山

のもれそら(拾員)上「ゆふまぐれ竹のそ山よかくろへてひとりやそらふ庭のまつ
 かせ(新古)冬具親「今のまさらでもまがふいづれかかひとりふりゆくよはの松風
(續拾)冬忠良「さえゆけば谷れちた水おとたえてひとりこそらぬ峯ハ松風(壬二)中
 「草も木もさぞああらし山風よひとりしをれぬ萩れおとかか〇鹿かどよはいと
 多けれとあけは右よあけたる歌の中かたちなき風あともいへるハ正明説のこと
 くそりといふ意よあたれる也花もみち虫かとも數あるものあるよいへる也此さ
 まよいへるひとりいといふるたうたよは見えさるは後詩よりうつりいひさ
 まなるべし

日日撰撰「落くる」四此廿八日よかん舟よのりなん日ぞりたりければ(空穗)嗟
岷院四「ひだんのそとよれ日をとりにてさるべきことおそしまうけて後の宮まう
 ち君よしのびて物せん(大鏡)三たゞとくくせさせ給ふべきかりなよりよれ日も
 とらせ給ふそこのひのおそしりへして(源)玉葛三四月の廿日のそとあひとり
 こんとするそとあ(同)薄雲五日おそとらせ給ひてちのびやあさるべき事をどの
 給ひおきてさせ給ふ

ひとり男(蜻蛉日記)下「かくいあれと只今のそとくあてハ行末さへ心ぞそきあ只ひ

ひとり男あてあれば年比もこゝかゝこゝあまうであそむる所ふの此事を申つくゝつれ

ひとりたち 見ノ(空穂 嵯峨院) 卅宮をかゝけおてひとりたちゝあゆみそとめ給ふ

ひとりね 獨寐(源あかし) 廿こゝろを死ひとりねのなぐさめおもあどの給ふ(同)

三「ひとりねの君もゝりぬやつれととおもひあかゝ此浦さびしきを(同幻) 三か

りくゝかゝるさびしき御ひとりねおかりての

補「ひとりむゝ」(拾玉) 一「身を死つるひとりむゝこそあそれなれかど後世をかく

のおもそぬ

ひとり娘(空穂 菊の宴) 卅時の上達めのかゝづき給けるひとり娘十四才おて智とら

れて(瀧松) 廿八 中納言也 五 君のまたかりらんひとり娘あどのやうお ヨシノ、志バも目とな

ちきこえ給せんことうゝろめたうおやつりかく覺えつゝ

ひとりる(狭) 四 中ノ 十八かゝるひとりるをゝ給ひつゝ身をこぐゝたまふことたえざり

けり 海口

ひとりぶゝ(後) 三 雑 ためたるめも侍らせひとりぶゝをのみまど女友たちのもとよ

りたそふれて侍りければ(空穂 樓の上) 十七 上ノ ころき人た小子をおもひてうちそへひ

ひとりぶゝをせらるゝお

ひとりこ(万) 六 卅二 「ことゝおぬ木をらゝいもどせありとふをたゞ獨子ああるぐる

りさ(伊勢物) 四 八 十ひとつこゝあさへありければいとあさうゝ給ひけり(空穂 藏開)

上、むゝゝひとり子をもちゝおこたゝ給へり一人の御殿あかんありゝ

ひとり言(土佐日記) 此哥をひとりごとおしてやみぬ哥云々(狭) 廿六 一ノ いろおやのこ

りゆりゝきひとりごとりか(源をとめ) 八 廿 雲るのかりもどぐとやひとりごち給

ふけそひ云々ひとりごとを聞給ひけるもそづりうて(夫) 廿 行尊 「かたらへと耳を

山のとどゝぎはひとりごとする心ちこそすき(空穂 樓の上) 六 上 犬宮南の山のりた

を見出し給ひてひとりごとお 詞宮もろともお見え奉らぬよどの給ふを(源少女)

七「こと事よりのあそびの方れさえの猶ひろうあせせりれこれおかよそゝ侍るこそ

かゝこれれひとりごとおて上手おかりけん事こそめづらゝき事なれなどの給ひて

ひとりごち(落くち) 一をりゝの御てやひとりごちあたるれどりひあけある御けゝ

さかれバ(源 末摘) 卅 卅 哥云々 心ぐるゝの世やといいたうなれてひとりごちを(同

柳) 十 十 うちながめてひとりごちおとれ(同 帚木) 十 打ひとりごちたるゝお(同 夕かほ)

四十云々ひとりてち給へど(同 早蕨)十心やそくやなどひとりてちあまりて宮の

御もとみ参り給へり(源 稚か本)四ちとのおとゞの御ぞうの笛のねあこそよたな

れあそひとりてちおさす(同 てならひ)五四十かゝれとてしもとひとりてちあ給へり

ひとりあみ(狭)二下もーから國の中將のやうよ子持ひとりやまうけんとをらんと

これあがらまれーひとりあみせられ給ひけり(源 若紫)四ひとりあみーつゝふー

給へり(同 末摘)三十こゝろをらぬ人々なぞ御ひとりあみひとゝがめあへり(狭)

卅一中いひたもふれ給ふ御けそひのきりまをーうめでたければ弁れめのもひとり

あみせられて木丁のそころびよりのぞけり

ひとりー(ドナラカ)空穂(菊の宴)三「われひとり鶴と松とを見るよりもひとりひ

とりの君よとぞ思ふ(扶桑)廿九長嘯子名波道圓餞別「見ー友れひとりーがいでゝいなを

たれとながめん故郷の月(源 白宮)十右のおとゞもあまた物ー給ふ御むせめたちを

ひとりーひとこゝろざー給ひあがらえことお出給もせ(古)戀三よみ「おもふと

ちひとりーが戀ーあ誰よよそへて藤衣きん(竹取)二此人々の年月をへてかう

のみいまーつゝの給ふ事をおもひ定めてひとりーよあひ奉りたまひねといへを

(大和物)四生田川ノ所親ありてかく見ぐるーく年月をへて人のかけきをいたづらよお

ふもいとろーひとりーよあひなば今ひとりがおもひたえあんどいふよ(頼政

集) 下(玉葉)戀五「きゝもせせこれもきりれど今いたゞひとりーが世あかくもが

か(源 わのな)上九ひとりーつみあ死時よのおのづからもて直をさめーどもあり

(大鏡)八いづれともなく見ま死らそしてーくちをーくこそ何事よりも彼夢れきり

まろーさよなどころもたづねさせんとー侍りーかともひとりーをたあえみつけ

せなりあーよ(源 稚か本)七ひとりーなからまーくバいりせりありーくらさまー

○宣長云二人間ニテ何方ニマレ一人ノコナイヘリ今ノ俗ノ心以テ思ヘハ一人毎ニ

ト云ガ如ク聞ユレトモ然ニアラズ(源 稚か本)九一所々々世よすみつ死給ふよをが

あらを云々コレモ同意ノ詞ナリ(沙石集)ひとりーも心やすくてこそありたけれ

バ云々

ひとりあみ(空穂 藏開)下十七よの中よすみあくきものひひとりあみよまさるものを

りりけり(源 わの紫)十ひとりあみよてのまかんまたよけあ死すとゝつねの人あお

ろーなをらへて(同 くてふ)六きたのりたもうせ給ひて此三とせをかりひとりあみ

あてこび給へり

ひとるる 一類(源 浮舟)六此大將殿の御さうの人々といふものいみトきぶとうの

ものさもあてひとるるこのさとよみちて侍るなり(榮うたかひ)十こきをみてこれ
ひとるる此外のどのをらみなあるの不斷經あるの朝夕つとめさせたまふ
ひとをれ(源花の宴)三立てのさりあをせりへを所をひとをれなりきさりまひ給
へるよあるべきものかくみゆ

補 人をいづめて(伊勢物)六十ねやちりくありければ女人をいづめて孫ひとつを
りりお男のもとあ来りけり

人々人ともせせ(枕)二ノいさゝりも此御事おたがふものをばさん一人をば人とも
おもひたらせ

人ごろく人めが里(源空蟬)初あかがちあり、づらひたどりよらんも人ごろかるべ
ろきナリ初あかがちあり、づらひたどりよらんも人ごろかるべ
く云々かくていえやむまう御心あり、り人わろくおもやうわびて(同桐つは)十

いとゞ人ごろうりさくなおかりそつるもさだの世ゆりうかん(同帚木)二をま人
わろくつめくもるれとさりともこよひ日比のうらみいとはなんとおもう給へいお
(六帖)四長哥(古)同よみ人云々あふことりたう何うも人ごろくみん(源帚木)廿

いづりたあつけても人ごろくもしたあかりける御ものがさりりなとてうちごらひ
おもさうせ(同すま)初ふるさとおやつりなかるべきを人ごろくぞおやうみたる、

補 (同楨柱)九いませういませりき人をたててもてりづりんりたせみお人
ごろくてそひもの給せんも人聞やさうりるべ(同柏木)十うちひをみつゝ見給

さまれいいこゝろづようあざやりおそりりある御けしきなをりなく人ごろく
人わろき(枕)十六えやうのさまかとぞ少一人ごろき補(源末摘)廿さまづゝお人
ごろき事どもをうれへあへるを

ひとごたり(源東や)十おそひとごたりのつらうとおもそれ人おはまこしそいらる
とも(枕)七さうのふえなどいとおもろううひとわたりあそびて(源紅葉賀)十かた

は調子どもをたゞ一ごたりおならひと給ふ(同をとめ)十博士のりへさうべきふ
いづゝをひきいでゝひとごたりにませ奉り給ふ(同楨はしら)十女の御心のみた

りがそしさまゝあかくうらみごたり給ふひとごたり見さため給いぬ布とさもあり
ぬべき事かれと(同幻)三ひとごたりづゝいりあらんとすらんとおやうたりいお

人ごたせ(源東屋)五十人ごたせことも侍らぬお〇衆生濟度のことナリ(後)維一
七條后

人ごたせことたあなをなありもあがらのまうと身のかりらん
人ごらそれ(源よこ笛)三二の宮もく人ごらわれかるやうあてあがめたまふあり

(同柏木)四十あそれけいりお人ごらそれなることをとりそへておやあらんと思

ふもさゞならねば(同 竹川)二と人知らぬ心いられを(補 枕)七八さすか
み人わらそれみあらとねんぞるいとくるしけなり

人知らへ(中務集)二「今更お老のためとを春日野の人わらへなるさかまつむりな

(後) 雜二 教敏「万代とちぎりし事のいたづらみ人知らへおもかりぬべきり(同) 戀五

人し「糸みなけば人知らへかりくれ竹のよみへぬをたふりちぬとおもせん(源 六)

ふひ三よの人ぎゝも人知らへまからんことゝ覺す(同 東屋)六もいおもそぞかる

御こゝろさへも見えさひと知らへまかかうかんあるべきといひけるを(夫) 卅六

「こひいなば人知らへまなりぬべし忘ひてをいせんあるよさりも(源 六)

な上三いまいさりともとのみわが身をおもひあがりうらなくて過ける世のひ

とわらへからんことをしたよの思ひつべし給へど

人さき(源 末摘)十いざみんとしもおもそねさよみるとしもおかしといらへ給を

源詞頭中將 人さきしけるとねたうおもふ(狹) 二ノ上。大將 いろくのもみぢがさねの

心源ノ 上まくれかるの云々めもかゞやくさうりみゆるのりつ着な給へる人からなる

べし立田姫の人さきなどしるよのあらと見ゆるもてあしけさひのあくまでけ

さうろそづりしげよ云々(伊勢集) 卅(夫) 九「あるくもの人さきもせぬものからさ

みづ(夫)みをとあみたいながれざらま(十六夜日記)もとより東ぢのみちれおくまでむり

しよりすとゝぎはまれかるからひまや有けんひとをぢよ又なりせのよまれまも

きく人ありけるこそ人さきしけるよと心づくしうらめしけれ

人(源 空蟬) 二小うちきのいとなつちし人さかあしめるを身ぢかくならしつゝみ

る給へり(同 横ふえ) 八和琴をひきよせ給へればりちましらべられていとよく引か

らしたる人さきよみて(同 竹川) 三こうちきかさなりたるをそなぐの人さなつち

うをみたるを(同 紅梅) 四源中納言のかうさまあこのましうのたれおほささで人

がこそよあかけれ

ひとがそり人代(空穗 藏開) 上七云々そのりまのこせんのことひたき奉らば同ト事

ぞや宮あやしの人代りや

ひとりへり(狹) 四ノ中廿。母君ウセ控のそどもをたぬれば御しつらひなどもれいのや

うああきらりあもてあさるゝあつけても今ひとかへりりなしされりせをふこゝち

し給ひて

人(狹) 二ノ下。大將高野 くれたあいとおもそぞあ人さかあむつちしとおせ

どとのゝあながちあをへさせ給ふ人々のえとゞめ給さざるべし(宇治拾) 二ノきの

ふ参らざりし相撲かどのあまためしあつめて人ガちあかりて

人ガと人形(夫)九待賢門院堀川「身ハせて、人ガたとたおおもむぬをなみ、そガぬくみ

そぎあるらん(和名)十三偶人、史記云土偶人木偶人俗云人形野王按凡削物爲人

像皆曰偶人也(源東)廿八かの人ガさもとめ給ふ人あみせ奉らさやとうちおもひ出

給(同)三かの人ガたの給ひいで、(同寄生)十六むかおせゆる人ガたをもつくり畫

あもかきとりて云(同七)八四十こととくしき人ガたをのせてなぐけを見給ふあも

(夫)九定家「みそ花川からぬあさぢれ末をさへまなひとがたお風ぞあびかす(同)同

顯「いかおせんこれからさだのかつさらへその人ガたのかぢならぬ身を

ひとかた一方(狹)二ノさりとて今もひとりさ上の御けしきあまたがふべき心ち

もせせ(夫)十一爲家「あさまたれなかせ、つゆあかたふきてひとかたをよく風のいた

萩(源夕顔)十一いまひとかたぬしつよくなるとも

○ひとかたトチラカヒ(源浮舟)五十。右近。カナルカヒとかたく、おせ

定めよ宮も御心さしまさりてまめやかあたふきこえさせ給ひ、そあたさまあもあ

びかせたまひて

一方からせ(源夕)は)十北方ウツセをばるて下りぬべしとき、給ふあひとかたな

らせ心あはたゞしくて

人ガたき(榮花山)十。心おど一のみこうまれ給へる梅壺をおきて此女御のる給そ

んを世人いかわりのいひおもふべからんと人ガたれのとらぬこそよれおとせ

いつ、まぐし給へば

人がら(源浮舟)廿一とあそれと人のおもひぬべきさまをしめ給へるひとがらあり

(伊勢物)段十二人がらの心うつくしく(源空せみ)十一「うの蟬の身をかへてけるこの

もとあ猶人がられあつかしき哉(同浮舟)初人がらのまめやかあをかいうもあり

かきと(同)四終びまさり給ふま、あ人がらも世のおせもさまことあものし給へ

ば(同若紫)十「あうしかれど心そづかう人がらもやんとなく世はおもそれ給へ

る人なれば(同)十人がらいとそくよかあきらしくして(同)五女御あはい

とこよなくおもひおとしきこえ給へれど人がらかたちをいとうつくりうぞおと

しけいさる(同あふひ)五まのりのそどかぎりあるおせやれとあをふことおそく見所

こよなく人がらと見えたり(同)廿御子どもをらしくいとおそかるあ云々人が

らあ忘さうひつ、心あまかせたるやうなるおせえいれおひひて(同)廿もの、

あそれも人がらこそあべけれ(同)すま四十さい相あかりて人がらのいとよければ

(同 帝木) 四十人がらのたをやぎさるあつよ死ころをいひてくそへたれば
人かけ(源はつね)六をかかけあるをらへべのすがたなまめかく人かけはあまた
いて(同 松風)九御そかとりふより死たりひとかけみつれてきかたのもの
れ侍らねどかこければえこそ(同 椎か本)廿かゝるさまのひとかけをどさへた
えそてんそと(同)卅風の音もあらゝかおれいみぬ人かけもうちつれこわづくれ
(同 神)十一とくくれていそぬの水もこりりとちまゝ人かけのあせもゆくりな
人かけもせせ(空穂 櫻の上)十六とくく(草の八重葎の板下きよりも高うおひ云
人かけもせせありしを思ひ出給ふ(堀次)故郷 一むぐらそひよもぎが袖とあれそ
ていふりふしさとの人かけもせせ

一かさね 源 若菜 上六たゞの殿上人よりろきそかが一かさねこしざしまでつ
ぎくお給ふ

ひとかき 人数(源 總角)六十 此人かきならぬ女たちのむかひ物語いふを(同 帝木)
九よろづおみたてなくものけさきやどを見過して人かきなる世もやとまつかたを
いとどのどかお思ひをされて(同 明石)廿 人数もおおざれらんものゆゑとれにい
みどき物思ひをやそへん(同 蓬生)三 かみしもの人数をくなくなりゆく(同 玉のつ

ら) 初 右近の何の人数ならねどなすそのかたみと見給ひて(同 椎か本)十七あぎそ、
しく人かきめかんとおもふともをれこゝろおもかなふまどきよとなら(同 寄生)
六人のおもひたりしとよりの人数おもあるやうなるありさまを

ひとよ 一夜(允恭紀)八あまたの終せとさゞ比等用能未

ひとよろひ 細一雙あり(抄)一雙の草子二帖也(源 梅かえ)十みづから一よろひの
かくべし(同 紅葉賀)十一ついかひ、なおすゑてそゝきる給へり三尺のみづー一
よろひおをさしつらひをゑて(同 東や)卅こなたのそかれさるかたおをさして
高きたかづー一よろひさかりたて

一よろこび(空穂 藤原の君)卅かかうとがいらへはれもこの比のささぐれてひとよ
ろこびもせでぞこもりをる

ひとよづま(神樂)酒殿歌 おそとりのかけろとなきぬなりおきよ、こがひと
よづま人もこそみれ人もあそみれ(万)十六、一とが門あちどりをかくおきよおき
よ我ひとよづま人おをらゆな

一よまつ 一夜松(新千)神懸 一ひとよまつ千世のそゑはの老木までこたかくか
りぬ年もくらるも

補 人よびの岡 宇治拾 一、ひとよび此岡とてあるつかの上あていふなりけり

人たち 源 玉かつら 卅 右近聞えおらせ人々もおのづからさて人たち給ひなさおと
とれさみもさづね聞え給ひかん

人たぐへ 源 蓬生 十、よくたづねよりてうち出ま人たぐへしてのをこならんとの
給ふ 同 帝木 四、人たぐへおこそ侍めれ 同 空蟬 八、人たぐへとたどりてみえんもを

こがましくあやしとおもふべし 同 宇治拾 二、も一人たぐへたらんいどす
く 同 廿、人たぐへかとするおやとおやけるすどお

人たのめ 古 貫之 一、かつこえてとくれゆくりあふ坂の人たのめかる名おこそあ
りけれ 信明集 廿、一けふのうちおいかともいひそて人たためなることか

せられそ 光經集 一、よしの山されみの花もかりけり人たためなるみねの志ら雲
同 万代 冬 一、春をまつ梅のたち枝あふる雪い人たためなる花おぞありける 新

古 秋上 俊成 女 一、大あらされ杜のこのまをゆりかねて人たのめなる秋夜の月 同 同 家隆
一、有明の月まつやとれ袖のうへお人たのめなるよひのいなづま

ひとたまひ 日次記 七、卷十 康治三年五月廿六日條云是夜有人魂自良向坤其体甚大 云々
拾芥抄 一、簾中抄 等二人魂ヲ見タル中誦スル哥アリ 万 卅一、一人魂のさをなる君

がたゞひとりあへり一兩夜のひさしくおもほゆ 更科日記 五、此曉よいミドくお
ろきなる人たまれたちて京さまへなんきぬるとかたれどともの人などのにこそを
とおもふ 〇コレハ現在ノ人ノタビニテ家ノヲチオモヒルガソノ魂ノアクガル、
由ニイヒナセル也

一とまり 著聞 十、一條二位の入道のもと高名のそね馬出來けり秦頼久を召ての
せられたりけるお一たまりもせせねおとされけるを 同 十二、あがり馬おのせら
れたるお一たまりもせざりけり

人たまひ 空穂 初秋 下、六、仲忠ノ母來ル所外ノ 一、いりて人さまひならん御几帳まる
らんおいかまさどへどりあつかひるなん 延喜式 卅、宮内省十典藥寮五月五日進
菖蒲省輔已上與本司共入奏進其詞曰宮内省申典樂能進五月五日 能 菖蒲又人給 乃 菖
蒲進 登 申

ひとたまひ 出車 源 あふひ 七、つひは御車をもさてつゞけつればひとたまひのおく
あおしやられてものもみえせ 和名 十一、漢書注云副車 會 閉久流滿俗 後乘也 同 空
穗 藏 開 下、八、こかねづくりの御車二ひとたまひの御くるま五つぐして出給ふ 枕

九、よれ所の御車人給ひひきつゞきておろくくるを 同 廿、人たまひ引つゞきて九
廿六

てるこそいとめでたけれ(源 薄雲)八人たまひよろしきか人わらそなどのせて御おくりおまゐらす

ひとたび(源 夕かほ)十いまひとたびいあるまどきことおやと小君をかたらし給へど(同)五いまひとさびとふらひみよと申たりか(空穂 祭の使)九ひとたびお

さとわらふ聲のそ
ひとぞう 一族(源 わか紫)卅いかでかの一ぞうおおやえ給ひつらんひとつきさいを

らかれをいおなぞおもふ(同)七今いといと一ぞうのみかへす(さう)え給ふ事限あり

ひとつ(古)秋上千里 一月みればちぎし物こそりなけれ我身ひとつの秋はあらねど(續拾)秋上俊成卿女

「むいのねもどがみひとつは秋風まつゆわけわぶるをのゝの原(伊勢物)段 一月やあらぬ春やむりの春ならぬ我身ひとつのもとのみよして(と

りうへ)三ノ心ひとつはおもひあまり身をうしかひてよとさきこがれ給ふ(拾)神樂(重之集)一いくよよりかたりつたへんそこざれのまつれちとせのひとつから

ねば
ひとついろ(源 薄雲)二殿上人かどあべてひとついろよくろみわたりに

ひとついへ(土佐日記)中垣こそあれひとつ家のやうなればのぞきてあづられる也

ひとつそら(源 朝顔)七御そらからのきんたちあまた物し給へとひとつ御そらから

ねばいとうとくく(同 桐つは)卅母みや内のひとつきさいをらよなんおそしけれ(同 竹川)七藤中納言故大殿の太郎まさせいらのひとつをらなぞまゐりたまへ

り
ひとつ(源 横笛)十二の宮のわりぎみひとつよまどりてあそび給ふを(同 夕露)

二むいのねもありのかくねもたき此音もひとつよみたれて(千載)春上「天津空ひとつよみゆるここのうみは浪をわけてもかへるりりかね

ひとつよなる(枕)六わびしけよみゆる物、雨のいたうふる日ちひさ死馬よのりて前驅したる人のかうふりもひしけうへのきぬも下がさねもひとつよありたる

ひとつつり(興風集)二「うはくこく色のまがへぞをなといへをひとつつりよよみえわたるりか

ひとつ書(狭)四十一上これのあやめたまふべきよもあらお娘のひとつがきかれればちらさどとてとの給ふ云々これの例のせんとがきとみ給へればあかぢちよもゆりからでさまとくとひきやりてさしやり給へるを

ひとつがひ(後)傷哀ひとつがひ侍りけるつるのひとつがなくなりよければ云堀次をし「山川よともなれをしのりけをみて一つがひあるこかちをらむ(源 藤末葉)兼昌
廿藏人所のさくゞひの北野よかりつらうまつれるとりひとつがひを右のまけさ、
けて

ひとつづりひ人使著聞十一所々人づりひをまらりして

ひとつれ(夫)十二爲家「ひとつれのをそれいので、をぐら山峯よものこるさをしりの
こそ

ひとつむせめ(源 柳)五十まさかくりづくひとつむせめを

ひとつるん(源 句宮)三十ひとつ院のうちまあけくれ立かれ給へば

ひとつの門(夫)廿一衣笠内大臣「かりせめよ三つれ道をもをへぎひひとつの門をいり
であらま

ひとつおとゞ(源 句宮)九もとよりひとつおとゞよて宮たちもろともよおひいであ
そび給ひ御もてな

ひとつおもひ(源 柏木)三なげのあそれをもけ給ふ人あらんをこそひひとつ思ひ
よもえぬるをるよのせめ(古)戀一よみ人しらす「夏むの身をいたづらよなれこともひ

とつおもひよよりてなりけり

ひとつくち(源 常夏)三廿いまはひとつ口よ詞なませられ(落く布)四おもころのこ
まとひとつ口よいふべきよあらむ

ひとつ車(源 末つむ)九ひとつ車よのりて

ひとつ草(古)秋上よみ人しらす「みどりなるひとつ草とぞ春のみ秋のいろくの花よぞ
ありける

ひとつづま人妻源紅葉賀廿六一人妻のあなをづらそあづまや此まやのあまりもな
れトどぞおもふ(催馬樂)東やおひらいてきませ我や人づま(万)十一一「むらさけ

の匂へるいもをよく、あらば人づまゆゑよわれこひめやも(同)十二一「あめのうへ
よ來るてかく鳥めをやをみ人妻ゆゑよ我戀よけり(後)戀二よみ人しらす「人づまよこ、ろ

あやかくかけそ、此あやふれもの戀よぞ有ける(万)十三一「あきら引きたへの
こそしをみればひとつづま故よ我こひぬべ(補)十四一凡よこれおもむ人妻

よありとふ妹よこひつゝあらめや(同)十五一他妻よこれもまどらむわがつまよひと
もことゝへ(同)十六一「もみぢをのそぎがてぬこを人妻とみつゝああらむこひらき

物を

いひて

ひとつもの(源 藤裏葉)八夢のこゝちして見奉るよも涙のこゝまらぬひひとつ物

よぞみえざりける(後)人二よみ「うれしきもうきも心ひひとつよてわかぬもの

の涙なりけり(源 柳)四十五女房源ノさもたぐひなくねびまさり給ふりな心もとな

き所かく世よさくえ時よあひ給ひし時のさぐひとつ物よて何よつけてり世をおぞ

らあらんとおとせりられ給ひしを(同 少女)四十おそありいろをき給へればいよ

いよひとつものとかゞやきてとえまがせ給ふ(同 藤のうら葉)廿。冷ノ御いよ

よねびと、此をり給ひて源トたゞひとつ物ととえさせ給ふを

ひとつのもの(源 若菜)上六名たりき帯御をりしなど云々ふる死世のひとつのもの

と名あるかぎりひみなつとひ参る御賀よかんあめる

ひとつかべ一鍋(空穂 織開)中十五大いなる白うねのひさげまわりなれあつもの一鍋ふ

たよの黒方を大いなるかそらけのやうよ作りくめておそひたりとり所おの女の

ひとりこく菜つみたるかたを作りたり

ひとつなり八中(源 松風)三よそりよまをゆきひとかりいとせしたなく(新六)霞光俊

「こととけき世の人中をのがれても春の霞よたちまどりつゝ、

ひとつながれ一流(續拾)釋教一流の書をかき置侍るとて前權僧「谷川のこがひとな

がれかきとめて絶ざりけり人よあらせん」後よこれをみてよみ侍ける法印「か

死とむるこが一かがれ末りけてたえせつたへん谷川の水

ひとつなれ人馴(源 花の宴)九男の御とせへなれをこし人おれたることやまどらん

とおもふこそうしろめたれ(同 わかあ)下五から猫の云々心をくしく人なれたるの

あやしくなつりしき物よかん侍るなぞゆりしくおぞさるをりきこえなれままふ

補(更科日記)いとをりしけある終こやうそんとあるよいみどろ人なれつゝかたそ

らようちふしたり

補(ひとから)千載賀八條前「ちとやふる神世のことも人ならばとそまじ物を

しら菊れそな

ひとつならそし(源 寄生)五十。カナルなべての世をも思ひめぐらしふりき情をもあ

らひ給よけるいとそしの人ならそしやとぞ

ひとつかぶり(万)十五卅五「さい竹の大宮人の今もりもひとなぶりのまこのみさるらん

一云今さへや○千蔭云娘子ガコニヨリテ罪ナハレシナブルナルベシ或云宮人ノ

妹ニ戯レシヲ妬テヨメルナルベシ(遊仙窟)五嫂爲人饒劇 此劇ノ字ヒトナブリ

ト訓セタリ

ひとあみ(拾)長哥能宣あやめぐさあやを死身よも人あみよりゝる心をおもひつゝ云々

雲井そるけき人をよおくれてかたくこれもあるらゝ源玉葛九人なみくゝ同あらし冊い

つの世よ人あみくゝよかるべき身といおもとざりく順集「君のそやひとな

みくゝよ出さちてちづみよ一づむ我よあゆあよ源帯木十人あみくゝよもなりを

こゝおとあびんよそへて補(金)秋能因「たなをたれこけの衣をいとそ中ひとなみ

なみよかゝもしてまゝ

ひとあびき(夫)十八爲兼「里遠死烟の末れひとあびきさらで野への雪れみのいろ

ひとあび爲人也(拾)哀傷「人あゝ胸のちぶさをむらよてやくすみ染の衣きよ君

補一むら上「よゝのやまをきぢづさひよ尋入て花見しそるの一むらりも

一むらキヌニ(後)戀五白きぬさも着たる女どものあまた月ありきよ侍りけるをみ

てあゝたよひとりがもとよつらそゝける有好「白雲れみな一むらよみえくゝ立

出て君をおもひをめてき(拾)秋(遍昭集)「からよとき枝よひとむらのこれるの秋

のりたみをさぬなるべりけり(遍)

一むら草(夫)兼冊六「糸らひそるちづをがまつをさをくり此一むらくさとみてやよ

るらん

補一むら戀二小町「わが門の一むらをさきかりりそん君がてなれの

駒もこぬ哉

人うとし(源末摘)三かいひをめひとうとうもてなれ給へばさべきよひかど物でし

までぞかたらひ侍る(同蓬生)七此姫君のかく人うとき御くせかれむつましくも

いひりよひ給えむ

ひとうた(土佐日記)ひとうたよ事のありねば今ひとつ

ひと(今物)もこのしたかりねれば云々物ぬぎちらしていそぎひどのへ行たり

けるよへむりひりて又物もなかりけり廣足按ひどのひりどの畧るるべ

(和名)十四坐臥部説文云臧音威和廬也國語注云廬音行清廁也

人のそ(源初香)十一ひたちれ宮の御うたの人のそあれば心ぐるくおぼして人

めのかざりむりいとよくもてかゝ聞え給

補人の女(後)戀人のむせめのもとよ忍びつゝかよひ侍けるを(同)戀人のむせめ

よ忍びてかよひ侍けるよ(同)一雜人のむすめよ源かねきかそと侍けるを(同)三雜父母侍りける人の女よしのびてかよひ侍けるをきつつけて(同)同人のむすめよ名たち侍て

人のうへ(源あかし)七十人のうへも我御身のありさまもおぞし出られて
人のおや(源あふひ)八廿なのめよかたをさるとたよ人の親のいりごおもふめるま

てことごりかり(夫)廿一一人のおやれおもふ心やいりからんこひの森れあきのゆふぐれ(後)一雜兼輔一人の親れこゝろのやみよあらねども子をおもふみちよまどひぬるりか

ひとの國(拾)一雜兼盛弟「ひのもとよさけるさくられ色みれさ人のくよもあらトとぞおもふ(源)六六受領といひて人の國れ事よかづらひいとをみて(同)若紫四

人の國をよ侍る海山のありさまを御覽せさせて侍らば(古)一雜北へゆく云々此哥のある人男女もろともよ人の國へまがりけり云々女ひとり京へりける道云々(伊勢物)十段人のくあゝても猶りゝることかんやまさりける(大和物)一りの男人の國れかみよかりてくたりければ

人の子(伊勢物)八十段(古)一雜上「世の中よさらぬわりれのかくもかか千世もといの

る人のこれため(万)一十八長哥ひとのおやれたつることたて人の子のおやれ名た

人の子の心(古)一戀五小町「いろみえでうつろふもの世中れ人のこゝろの花みぞありける(同)序今の世の中いろよつき人れ心花よかりよけるよりあたなる哥をりか死

事のみ出くれバ(つれ)一廿七段風もふきあへせうつろふ人の心れ花よかれよ一年月をおもへばあそれと聞きことのをとどお忘ぬものから(後)一春三よみ「春たちて我ぞふりぬるかぐめよは人のこゝろれ花もちりけり(續)一戀三長「あたれみうつ

ろふいろのつらければ人れ心の花いたのま(新古)一夏後成女「をりふしもうつればりへつ世中れ人の心の花ぞめのそ(拾)一上「あさが不よをよるをかくうつろは

ん人のこゝろれ花もかむり(拾)一六「あらされてうつろふ色のゝるければ人の心の花ををるりか(新)一戀四但馬「月草のうつろふいろのふりければ人の心れををる

ひとの手(後)一夏藤原のかつみの命婦よすみ侍りける男人の手ようつり侍りよける又の年杜若よつけてりつみよつりをさける(同)一雜三女のいとくらべがたく侍りけるをあひをさきよけるがこと人よむりへられぬと聞て男のつりよける

長峯義(同)一雜三女のいとくらべがたく侍りけるをあひをさきよけるがこと人よむりへられぬと聞て男のつりよける

がためよお死すゑどおなじよくかりいそいたり此人の手よありとさくひまことり○宣長云お死おなじのをさ也

人のものいひ(源 帝木)初かたりつたへん人の物いひさがあさよ(同 浮舟)卅三

も立とまらまろくおぞさるれど人の物いひのやをからぬよ今更かり○物いひの所可参考

人おと(源 をとめ)廿中さうとをひけど云々つとさいて人の音もせせ(同 花の宴)五

おくのくるよともあきて人音もせせ(万)卅二「あさひてる島のみ門よおぞしく人音もせねばまうらかあしも

ひとおもてもあらせ(空穂 みて宮)四かゝるほどよ侍従の君ひとおもてもあらせ口をうなりぬとのゝゝる

ひとぐ一具(源 末摘)卅の御衣をこよ御料とて人の奉れる御ぞひとぐ

補ひとぐ(大和物)六「よもぎおひてあれたるやどを鶯の人くとかくやたれどり

またむひとぐ(古)誹諧よみ「梅の花見よこそきつれ鶯れひとぐと鳥のイといと

ひもぞる(月詣)一法眼「さびしさをとふうれしき柴のいほよひとぐといとふあるりか(同)戀下隆季「志のびづま死まさぬものを鶯のひとぐといと何よか

ふ

補ひとぐ他國(万)十五「比等久爾のきみあしとぞいふすむやけくそやかへり

ませこひいあぬとよ(同)同「ひとぐよ、君をいませていつまでりあがこひをらむ

ときの一らなく

ひとぐち一口(伊勢物)六およそやひとぐちよくひてけり

一口からせ(榮 見はてぬ夢)廿陰陽師かよ物をとませ給ふよも所をりへさせ給へ

と申めればさるべき所かぞおぞしよとめさせ給へと又御よろこびあぞ一口からせ

さまふらうらかひ申をあやうおぞさる

ひとぐたり(狭)廿四中ひとぐたりも引つゞくべきこ、ちも給ねばいと引かづ

さてお死ふし給へるを云々(源 桐つは)廿八とそひとぐたり(同 紫)卅お死ひ

とくたり此御りへりのたまさるゝもたえそてよけり(同 末摘)初ひとぐたり

をもほのめり給ふめるよふたくざり(源 わけまき)四十御れうとおぞしきふたく

たり

補ひとぐま(紫式部日記)たれもとりそづいていかくれかけれど人ぐまをもよう

いそるよかくれてぞ侍る

増補新編源氏物語 卷之五十三

人くふ犬(著聞)十六 ざる程は其近へんよことかのめからせ人くふ犬ありけり

ひとくさ一種(源梅のえ)七。タキモノノ合ノ所 たゞ荷葉をいくさ合せ給へり(うつろ 藏開)

上一おとゞ下かるもの一つとの給へばさしぬきをぬぎて奉り給へばいかやいま一

くさをとの給へばしろさあせのそりまひとかさねをぬたて奉りて(源末摘)四み

つのもよて今いくさやうたてあらんとてふたくさ(みくさ(源うめえ)六)の

こが御ふさくさのい今ぞどうでさせ給(落くち) いくさもちひふたくさちひさやり

まをりうてさまふかり(源梅のえ)七 たいの上の御のみくさある中よ

補ひとくさもの(輔親卿集) おなト頃藏人所の人々一種ものしてまるまといへる

は菓子十種を山吹よませてそへり(同集) 閑院女御さふらひよ人々一種物とたす

は紅梅の枝よ鳥つけていたはとてうたよむよ

ひとぐるう(とりりへせや)三 さりともおのづら人ぐるう聞よくものいひ

のありしそやとおぞめされぬやうも侍なんりとて

ひとくもる(夫)廿六 入日さなみまをみればひと雲井ありしの浦へたよりよ

けり能因

ひとや獄 (宇治拾)四 東北るんのぞさつ講をよめけるひとりのもといひみどきあく

人よてひとやよ七さびぞいりたりける云々一二度ひとやよるんたよ人とていよ

りるべきことりの(拾)戀 人のめ侍ける男のひとやよせりてめのとれもとよつ

りそける「志のびつ」よるこそれいから衣ひとやみんとのおもさざりしを

(續古事談)五 長實 「志まものよいそとをさり法師つひよひとやよいるとこそ

さけ

人やり人やりならぬ せ〇契説源氏ニ人やりのおみたならぬよトモ人やりならぬ

枕もうくさりトモカケリ何事モ心ヨリナスナ人やりならぬトイヒ心ヨリナサヌ

チ人やりトイヘリ(新六)五 曉見か「月けいまたよふり」とやすらへばそや人や

りの鳥のなくなり(古)源 離別「人やり道の道からあくよ大りさのいれう」といひて

いざりへりあん(六帖)四 「人やりはあらぬものから魂とひとつ心よ身をぞうらむ

る(新拾)戀 前左大臣 「人やりはあらぬものからうらむるの身のこととりもおもひい

らせや(千載)戀 通親 「よよいらぬ秋のこりれよ打をへて人やりならぬものぞりあ

き心ナラズ人ノナル也 (源わかき)上 八此みやをらう奉りてふところをさらよと

かたせもてあつひつゝ人やりならぬきぬもみあぬらして(新古)秋 上「そなみよ

と人やりならぬのべよきてころのかたりつくつるらあ(源帚木)七 をりく人

やりならぬむねこがる夕もあらんとおもひ侍る(夫)卅一「あふさくら山さくら
どの關守の人やりならぬ花をみるらん(源 夕かほ)十一人やりならぬ心づくしはおも
ろしみたるゝことゞも(同 紅梅)九「心より人やりならぬ水おれればおれおらん
こともことわり(補 新續古)秋上「むろよりいり契てたなをたれ人やりならぬ
物おもふらん(著聞)五、四(金葉)下「たゆみなく心をかくるみたるとけ人やりなら
ぬちりひさぐふな(万代)戀五、勝「たえあんと思ふ心のたれおれれば人やりならぬこ
ひかるらん

心也○宣長云ことやうの誤なるべし
ひとやう(源 是たる)廿女しき所かりめるぞひとやうをめるとの給へば(注)偏ナル

ひとま 一間(狹)四、中みりうしひとまをりあけて御車よせさせ
ひとま 人間(源 浮舟)五十例の御隨身めして御みづから人まよめしよせたり(枕)六、

一人まよよりきてとがきみこそまづ物きこえん(源 あふひ)四十人まよからうとて
かいらもたけ給へるよ(空穂 藤原の君)四十これひとまよとてまつれ殿の大いきみ
の御文といひて奉り給へといふ(同 嵯峨院)五十曉がたよおとゞ人まをそくらひて
御ふみをいとちひさくくりて給ふ(古)春上「くるどあくどめがれぬものを梅の花

いつの人まようつろひぬらん(伊勢集)廿(後)戀三「逢みてもつゝむおもひのこび
いき人まよのみぞ終りなれける(源 紅葉賀)十のうの人しれぬ御こゝろよもいみ
とう心もとなくて人まよまあり給ひて(竹取)十月のうをみると思むことゝせい
けれどもともおれれば人まよの月をみていみづくなき給ふ(雄略紀)二遂共得間而出
逃入圓大臣宅云々(禮)万(十一)「人間守あしきまよとぎもこをあひみしからよ
事ぞさた多き

補 ひとまへ 人前(著聞)十これの人まへぞうしとおもふこゝろ候て

人まね(狹)十一上いひらぢちひさくあやしきいへどもよまよま一をぢづおきこ
たをを何の人まねをらんとあそれよみたまひつゝ(源 帯木)五むりなれすさみをも
人まねし心をいるゝこともあるよおのづからひとつゆゑづけてしづることもある
り(同 蓬生)八なりくよきひとのまねし心をつくらひおもひあがるもおほりるを
(同 是たる)廿こゝろあさけかるひとまねをのみみるよもかたいらいたくこそ(古)

誹諧よみ 人しらす 「さういらよ夏の人まねさゝのそのさやぐしよよをわれひとりぬる

ひとまね(源 繪合)三ひと巻よことのをつくして

ひとけ(源 蓬生)三いとゞ狐のすみりよなりてうとまうけとるきこたちよふくろ

ふの聲を朝夕よみ、ならしつゝ人けよこそさやうのものもせうれてかけかくしけ
れ(同 末摘)廿^四不とのせばう人けのまこゝあるなどよあぐさめたれど(空穂 樓の上)
六十ひさしよる給へる人々せたくて人けよあつりひくおやえ給へる(源 神)四ひ
さきやうすりよ光りて人けよくなく(同 松風)四かのこたりかんいど人けさこが
うなりよて侍る(同 蓬生)十これみつ入て云々みるよいさゝり人けもせせ(同 帚木)
九人けと不さこゝちしてものおそろしといふなれば(同 横笛)十三きんたちのいどけ
なくねおびれたるけそひかど云々女房もさしこみてふしたる人けよたひゝさよ
補(宇治拾)十五人やみゆると見けれども人けもなし云々あし原よて道ふみたる方
もなりりければもし人けよる所やあると川をのりりさまよ

○人のけ(蜻蛉日記)中^南おもてのううしもあけぬどころ人のけおやゆ人のえしら
せこれのみぞあやしと覺ゆるよつまとおしあけてふとまひりたり

人けなう(枕)十三人をも人けなう世のおやえあなづらはしうなりそめよたるをばそ
しりやひる(和泉物)われさへなんん人けなうおやゆる

人けなく(空穂 藏開)上^七ある時のきんぢがつたなくこれを人けなくうみいたし
たるよさへぞの給ふや(源 東や)七りみよをさしうけられぬさまよてまどらそ

んなんいど人けなうるべきよの給ふうし申すはさよよめさも申合ふんもしハ寄

人けなき(空穂 藏開)下^八仲患哥云々とうちうたふてあいとめでたし九のきみいと
をうしとさし給ふいと人けなきものよおやえなんありける(源 桐つは)十三人け

な恥恥をうくしつゝ(同 帚木)六身のうづみくらるみどかくて人けなき
人けなきもの(枕)四ノなどぞりさ人けなきものいあらん玉のうてなもどめ給ひま

しうバ出さこえましといふ

ひとけしき(源 浮舟)六十更よこよひハノ人けしき見侍りなばなりしよいと
あしかりなん

ひとふし(狭)二ノ下^{源氏}御内参りのけふあはまかりたりしよおやしとまりしひ
とふしこそ神の御りたさまうれしうおやされしうど(源 蜻蛉)四かの人のやうし

ひとりのまかりし心をふしたかへそめてさまよあるものおもふ人ともあるうな
源タのほ八さよそりおたふし御こゝろとまりて(枕)七ひとふしあそれとも

をりしともさしおきつる物の云々

ひとこ(一籠)うつ卒(國讓)上^八かうトさち花一籠
ひとこ(人言)源すま六^廿かをりりまうたよの人でとなれどりけても此方よせいひ

出ることなくてやみぬるさうりの人の云々(六帖)三、「人てどの志けみのさればみ
 づどり此れものうたねのやすけくもあす(後)戀一よみ「人てどのまことなりけり
 志た紐のとけぬまゝる心とおもへば(同)戀五よみ「ひとてどのたのみがたたの
 なまはふるあゝのうらみのうらみつべ(同)戀二「世中のうたねのかれや人言
 のとよもかくよもきこえくるよき(古)戀四よみ「うつせみ此よの人てどのよけぬ
 ればわれぬものゝうれぬべらなり(方)十二「あそなくもうよとおもへばいやま
 一人てどのけくきこえくるよも(同)十二「たゞけふもきみよあめど人てどを
 上けをあらめてこひとたるよも(同)十二「人言のよけくよあらば君もこれゆたえ
 んといひてあひしものりも(方)十二、人言をよけみと君を(同)十二、「きたまりて
 これもあそんとおもへども人之言こそ志けれ君かれ(同)同「糸もころよ思ふとぎ
 もを人言の志けきよよりてさえよころりも
 ひとこと 一言(源繪合)四「とるるとてさるよいひ一言もかへりて物の今ぞか
 なしき(同 権か本)十一ことよてもうけ給りおきてよくばさらよおもう給へおこ
 たるまどくなん(蜻蛉日記)下、「かつらきや神代の志るよふりよらばよ一ことよ
 うちもとけなん(源わらな)上七ひとこと申ておろそりよかろめ申給ふべきよ侍
 らねば

らねば

○人てといふ(枕)廿五いとくろがまよきまで人てといふよ

ひとことば 一詞(狭)廿四中よ一ことをもものかといひふれ給ふをりよこくうれ

きことよて(源藤のうらは)廿六位をくせとつおやれよよひのこともの折よよ

覺し出ければ云々うらりり折の一ことよこをよすられねと云々

人てち(源松風)八あどもろともよ出てのをよみ給もぬさらばこそ人てちもせ

めどの給へば 人聲(源夕のほ)三こなたりなよけとやくうとまよきよ人てよせせ

ひとことば 一聲(源わか紫)廿九のいよけなうものよまふ御ひと聲いりぞりとの給

へば(同)廿「いよけなきたづの一聲聞よよりあよまよあづむ舟ぞえならぬ(同)は

ときよ 七十今一聲きよそやまべき人のあるとれよ手かのこい給ひそ(方)十九長

歌ひとことゑたよもいまたきこえ申(後拾)春上「たづねつるやどの霞ようづもれ

て谷れうぐひすひとことゑぞる

人えり(源こてふ)三十右近めよいでよりやうよおとづれきこえん人をば人えりよて

いらへなどいせさせよ

ひとてら(大和物)六あひて物もいそんと思ひていきければかいけつやうようせよ
けりひとてらもとめさそれとさらよまけてうせよけりらふふ人さか人さか

ひとあれ(夫)十八雅有「ひとあれの風よりのちねづまりてたけれそいらむ夕暮の雪

補人あなづり(著聞)十法師めが人あなづりて云々

人あなづられ(源薄雲)五めなれて人あなづられなることゞもぞあらま

ひとあさり(夫)十七雅有「いづくへと沖つ小トまのひとあさりねもやすめたつ千
とりくな

人さごがー(源)タかは卅人さごがーく成侍らぬぞよとて(同)少女卅けさうトを
ふとてさごたつるうろみぞもちかうよりて人さごがーうかれバ

ひとさき(一坂)新千雜中「のせりえぬこの一坂のたらちねのいさめいみちやふみ
たがへけんこれをさこいめして御返し御製「たらちねのいさめい末もかたらねバ
今ひと坂れみちのまよそト

「さりり(古)春下そら「いさくくらされもちりかんひとさりりありなほ人さうき
めみえかん(同)物名「花のいろのたゞひとさかりけれさもへはくぞ露のそめ
けるたあむこの
どしはる

人さま(竹取)此たびのいりでりいなび申さん人さまもよ死人よおそはかといひる
さり

人さま多クア。人肺ト狭三上。大將母代こまやりよかたらふべきひとさまよ
あらねバ(源)空蟬五さるりたよいとをりいさ人さまなり(同)あらし六いとそらう
せむろなりとおせと人さまのあくまで思あがりたるさまれあてあるよおせしゆ
るしてみ給ふ

ひとさ死一咲夫十一寂蓮「うさかがらさてもあるよををみかへいかにひとさ死よ露
こがるらん

ひときは一際源帝木六心よまりせてひと死を人めをおどろりて(同)薄雲廿八大
納言よかりて右大將け給へるをいまひとさあがりかんよ(同)あかし十我より
よそひまさりもいの位たかくとき世れよせいまひとさのまさる人よはなびさうた
がひて(同)あけまさ二おもひな一れ今ひと死をよこの御さまのいことよな
どきこゆ

ひと京(蜻蛉日記)上一ひとつ車よそひのりてひとさやうひつきつゞきていとさよ
く死までのいりて此かどの前よりもさたるものりこれのこれよもあらせもの

ぬものを(源 帚木)五 ところたなくちをいさゝとというかりとおぼゆさりそぐ
れたるといかにひとくこそ侍らめ(同 繪合)六 御とのゐなどのひとくく給へど
(狹)三上。今姫君ノ扇へ書さまさへうらうへりみいひとくうてひとつまたらぬ
廿五。物書玉ヲ所ニ書さまさへうらうへりみいひとくうてひとつまたらぬ
哥をやがて扇のひまもかくかきかされたる云々

人いけき(源 朝かは)二十北おもての人をけきりたる御門の入給せんもかろく
けれバ

ひと碁(枕)十六 こん侍やまろもうたんと思ふいり手ゆるく給せんや頭
中將とひとくをなり

人いて(源 夕かは)初 人いてこれみつめさせてまたせ給うけるぞ

ひといき(伊勢物)百廿 四段 「おもふこといそでぞさみやみぬべきわれとひといき人
いあけれバ(拾)夏小野宮 太政大臣 「うすくくみたれてさける藤の花ひといきいろのあら
トどぞおもふ

補 一いきり(万代)雜二 信實 「深きよまづ一いきり聲たて、夕つけどりのまたね
てけり

ひとひ 一日(狹)四 下猶ひとひまでもころのどりなるさまよなりあまなくな

んとの給そけるを(源 紅葉賀)十 我も一日も見奉らぬいとくるしうこそ
ひとひ 一日。スギシ(源 若紫)二 あなりしこやひとひめ侍りしやおそいまはら

ん(同 紅葉賀)四 一日の源氏の御ゆふかけゆ、しうおせされて

○ひとひふつり(貫之集)下ノ(躬恒集)四十 一君はあそでひとひふつりは成ぬれば
けさ彦星のこゝちこそをれ(伊勢物)九十 悉く人なりけれをか死よやれりけるを
するかな(躬恒集)四十 一君はあそでひとひふつりは成ぬれば

今の男のものすとしてひとひふつりおこせざりけり

○ひとひひと夜(大和物)四 ひとひとよよろづの事をいひかたらひて

ひとひとり(源 桐つは)十 やもめをみかれと人ひとりの御うづれまとりくつくろ
ひたて、めやをさきとよてそぐ給ひつるを(同 帚木)九 せをき家の内此あるトと
すべき人ひとりをおもひめぐらま(同)卅 君の人ひとりの御ありさまを心のうち
まおもひつゞけ給ふ

人ひとりが(源 あふひ)廿 七 たりなき御をねをりを御をどりよて曉ふりくかへり
給ふ常のことかれと人ひとりがあまたまもみ給むぬことなればよやたぐひなくお

ろくがれたり(盛衰)四十 後世のさそりとかりぬべいとくと死侍り人ひとり
が子ならばこそろくの給ふらめいづれも宗盛が子なりななき給ひを○此人ひと

りといふ事なり

人々く(空穂國讓)下七いつしりも人々くなりおもたゞしきめをも見給へとこ

をおもひ奉りく(同樓の上)上十五さえも時あひひとくしければこそめでたう

りひあれ(蜻蛉日記)下中イノリ今限りし思ひもておたる身をば佛もいり六

給らん只今の此大夫を人々くてあらせ給へなどさりを申給へ(源あけまき)六

五あたらしくをりしきさまをあけくれの見ものまでいりて人々くもみな奉ら

んとおもひあつりふをこそ云々(同六十)世おどろへ給ん事のくもおぞゆる

あまりし人々くうもてあさをやとあやしきまでもてあつりさるゝ(枕)三あ

ぎやうかくよくき物の人々くうりきいづべき物のやうはあらねど(同四)頭中將の

どのる所まですこし人々くさかぎり六位まであつまりて

○人々くからぬ(榮見はてぬ夢)七位などもあさう人々くからぬありさまおである

みやとぞ世の人もいひおもひける

ひとひら(源東や)六屏風のひとひらたまれたるより心おもあらで見ゆるおめり

一ひらりみ(空穂忠こそ)七さるいみトき御とくお紙一ひらをたし奉り給せ

ひともと 一本(神武紀)十介彌羅毗苦茂苦(允恭紀)三壓乞戸母其蘭一莖(古)春下讀

「吹りせあつらへつくるものからば此ひともとのよきよといまま

一もとすき(古事記傳)十一比登母登須々伎ハ一本薄かり今世は此名負へる一

すた一本づ立てるを云

ひともり(枕)十一頭つれ給せぬせの殿上の臺盤し人もつりせそれは方弘の豆一

もりをとりて小さうトのうろまでやをらくひければ

ひともし時(榮楚王夢)四十も遠からねさしてひともし時はかりぬと申せせ

補ひとせまち(拾玉)二山里は外面の小田のひとせまちあらしめてへて種まれ

よけり

ひととち一筋(源玉葛)六四十古代の哥よみのから衣たもとぬるりことこそなれ

ねまろもそのつらぞりさらしひと筋はまつたれて今めれたる言のよゆるぎ

たまぬこそねたれことのあれ補(續古)戀五「ひととちいとふつらさとすら

きてこひきよのみぬるし袖な(玉葉)雜一「ひととち風はつらさよなさとと

やのどりある日も花のちるらん

ひとすち竹に(竹取)其竹の中よもと光る竹なんひとすちありける(蜻蛉日記)中下く

れ竹も一筋さふれて侍りしつくろもせしりさなといふ(同)中中植雨いたくふ

りこち風そけく吹て一筋二筋うちりたぶきたればいりてなすせんあまゝもが
などおもふ云々 **あやめ** 云 **狭** 十一 上ちひさくあやまき家どもも只一筋づゝお
死たすを同 同 軒のあやめを一をち引おとしていそたりきて **をみなと** 云 **拾**
戀五 ひとまる 「どおろくおもものにおもそき飛驒たくみうつをみおそれたゞひとをぢ
ぬなと 云 **狭** 四六 「これもまたまにぞ池のうねぬおそ一筋よやのくるゝりり
ける

ひとすぢ **枕** 三 水なりの池 云々 いづるをりもあるるを一をぢあつけゝるりか
いらへまろゝかり同 七 十六 今ひとすぢ御づゝのもどかりけるをとり出させ給へ
れば

ひとせくな **落くる** 四 人せくなゝりとして我御人らひ一人おとを三人おもづりへ
二人ととたゝ給ふ **源** 空蟬 十 人せくななりとてめゝゝりばよべまうのぢりゝりと
大和物 六 いとあそれよ夜ふけて人せくなよものゝ給ふりか **源** 帯木 三 殿上よ
もをさゝく人せくなよ御どのる所も例よりいれとやりなるこゝちするよ **同** **夕顔**
冊 三 これより人せくなゝる所のいりぢりあらん **同** **手習** 五十 御前よ人せくなよて近
くおきたる人せくな折よ

ひぢ **神代紀** 十 如葦牙之初生 **壑中**

ひぢ **もる** **榮** 本の 車 四 若宮たちの御うゝろみを **あやめ** つ べき 事 り の 給 も せ

ひぢ **むり** **源** 常夏 廿 かたちひぢむりあさいがあいさやうづれたるりたあて髪
うるもしう罪りろけなるを額のいとちりやりあると聲のあつつけきとあそこなそ

れたるなめり **契** 沖云俗おゲス シキナ土ケノハナレヌト いふ類なるべし又按
よ肱近よて手の短さをいへるり佛の三十二相の中お兩臂修直 **摩** **膝** **相** 又諸指圓滿 **纖**
長相とて有り古事記日本武尊の宮簀媛よ玉へル御歌よ「ひさかたのあめのりぐ山
どりまよさわさるくひゝのぢをたごやがひなをまらんとわれのをれと 云々 とあ
るの宮簀媛のかてやりまたごやりあるかひかをほめての給へりされば手も指もふ
とくて短きいけたかゝらねば其一をもて余をなせらひていふり **源** みをつくし 卅

つらづゑつれていとものがあしとおやいたるさまなりはつりかれといとうつく
けあらんと見ゆ御ぐゝのかゝりたるをどりらつつけまひあてよけたり死物から
ひぢむりよあいぎやうづき給へるけまひゝるく見え給へば **平家物** 十一 **主上** 廿五 こと
よ八才よぞおらせおそよませども御年比をよよりもるりよ終びさせ給ひて御り

たちいつくしうあさりもてりかゞやくをりり也御ぐくろろやうくくと御せなり
過させ給ひけり(空穂 藏開)上一六の宮云土器とりて左のおとゞま参り給ふをみれ
べいとちひさくひぢぐさふくらりよあいきやうつき給へり

補ひぢをる(加茂保憲女集)「ひぢをりてゆりれんものり春山此をき路のさくら
いまさりりあり

ひぢをりたる廊(枕)九ノひぢをりたるらう(注)臂折廊也廊のをれまがりゆく也

ひぢがさあめ眩笠雨(源須磨)九ノひぢがさ雨とりふりきていとあわたしけれ

(催馬樂)「いもが門やせなが門行をたぐりねてやどがゆりばひぢ笠のく雨もやふ
らあんちでたをさあまやどりりさやどりくてまらんちでたをさ〇契冲云万葉

十一の妹が門行過かねつ久うたの雨もふらぬりをよしおせん六帖おはひぢがさ

此雨もふらかんあまぐくれせんとあり此哥古へよりかくあやまりて催馬樂の哥も

これより出来たるり(枕)八ノ名おそろしき物、ひぢがさ雨(空穂 菊の宴)八ノひぢが

さ雨ふりりみなりひらめきておちかゝりなんととる時(頼政集)下七「いとそれ

たゞおいらと妹が門過ばふらかんひぢがさ此雨補閑田次筆云顯昭の袖中抄おひ

ぢがさの條あり曰六帖お「いもが門行過かねつひぢがさ此雨もふらなんあまぐく

れせん是の万葉集お「妹が門行過かねつひさりたの雨もふらぬりをよしおせん

とあるをやそらけたる哥也と云々私按おやそらけたるおのあらせ誤たるなるべし

万葉のうたをかきたがへ或の少し改めしこと六帖お多し歌の作者も亦たがへるこ

と處々ありさて抄お又曰催馬樂の「妹が門せなが門行過りてやどりゆりをひぢが

さ此あめもふらかんちでたをさあまやどり笠やどりくてまらんちでたを

さ催馬樂譜の一條左大臣雅信公作りたまひて万葉の後此ことをかれば彼集お違ひた

らん用べりらせと又曰源氏物語須磨お風いみづく吹出て空りたくれぬ御被もち

そてぢたちさごたたりひぢがさ雨とりふりていとあこたしければ皆歸さまひか

んとするよ笠もとりあへせと云々以上袖中抄私按万葉の哥を六帖お誤てより催馬樂も

本の出所を考へせ六帖より源氏物語も亦催馬樂よりて文を成れしとおやゆひ

ぢがさ雨といふものあるべりらせとことこられしはさそがの顯昭也綺語抄俊頼の

無名抄童蒙抄とも俄よふる雨をいふとあるをも引れたり俄おてひぢを笠おさる

といふ也袖をりづくをいふとあるも詞おつきて説をかしたるおて肘を笠といふこ

と實よのころえぬことあり赤躰アカダカよて行人なりとも肘を笠よのかるべりらせ袖笠

こそことこりさることなり凡今の哥よみもいあへよらせ中世已後の説を宗と

六うたれてひるみける所を（源）ひるむしる蛇床子（和名）廿二本草云蛇床子

補ひるむしる（枕）廿三（草）の條ひるむしる蛇床子（和名）廿二本草云蛇床子

和名比流
牟之呂ひるのこがよまひ（源）松風（五）姫君（三）オ（五）ひるのこがよまひ（源）松風（五）成玉（所）

補ひるくら（万）十八（九）ひるくら（万）十八（九）ひるくら（万）十八（九）ひるくら（万）十八（九）

ひるま（古）戀（三）ふ（か）「みつ汐のながれひるまをあひがたみとるめはうらよよるをこ

そまて（榮）月のえん（十）ひるまのつれも（一）おぼされけるよ（二）さらせ給ひて（源）夕

かは（六）十けさのそとひるまのへたてもおぼつりかくを思ひこづらされたまへ（同）帯木（卅）

「さ、げまのふるまひするきゆふぐれまひるまをぐせといふがあやな

さ（宗子集）一朝またた露をけけゆるから衣ひるまをりり此こひしきやなど（壬

二）下「おさしたま行てまがへん袖の浦あさみつしそひるま、つそと（兼輔集）

「もつしぐれふるまぬれつるこが袖のひるまをりりをみぬぞこびしき

補ひるぎつね（曾我物語）あいさやうの三郎がうた「よるからばころく、どこを

かくべきよあさまよましるひるぎつねりか

ひを（氷魚）源はし姫（廿）あつろり人さこがけかりされど氷魚もよらぬまやあらん

九

すさまじけあるはしきかりと（云々）**補**（宇治拾）五ひをそめていできさりなれば（云々）

此氷魚のこの外はすくかりければ（云々）此僧のそまより氷魚のひとつふと出た

りければ（云々）此比氷魚の目もまよりふり候なるぞ（花鳥）内膳式（云々）近江國（云々）阿米魚（氷魚）

日をそりらひ（源）東や（九）此月のそとよと契り聞えさせ給ふこと侍るを日をそりら

ひていつしうとおもねれそとよ

ひをりの日（伊勢物）九（十）むり（右）近の馬場のひをりの日むりひまたてたりける車

ま女の顔の（云々）**補**（古）戀（一）右近のうまバのひをりの日（夫）七（散木）殿下まで五月

五日の心をつりうまつれる「かがさねの花れたもとよりをるなりけふやまゆみの

ひをりあるらん

ひをむ（源）はし姫（卅）あつろをこそこのころの御らんせめと聞ゆる人々あれど何

ういそのひをむしああらそふ心まであつろよもよらんと

補ひをぐり（著聞）十二（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）

ひをぐり（著聞）十四（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）

ひをぐり（著聞）十四（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）ひをぐり（著聞）十四（十四）

ひをけ（火桶）枕（八）十一（十一）もろちりう同し心なる人二三人をりり火桶中あをゑてものが

たりなどをるそとよ（云々）火をくして灰なとり泥をさびて（云々）（信明集）「てをさひ

あひをけのおきやとりてけんこひしき人あそぬころりか(師氏集)「ぬぎかふる衣のつきあさつものへけふめづらしき火桶かりけり」

補 ひをさふる (新續古) 雜上 善節 「日をさふるなら此ひろそあもりりへてこぬ秋を」

杜の下風(玉葉)夏 道助 「日をさふる櫛のひろそあかく蟬のこゑよりさる、夕立のそら

ひこりこ (源あふひ) 四十をりしけなるひこりこかさかりをいろしあてまるれるを(枕)五 かまめりしきもの云々よくしたるこりこ(古事談)次居檜破子於御前

(實方集)宇治よてこれかれゆくまかけまさ此朝臣のひこりこのふたあ書ておこせける(うつろ 國讓)中 五大殿の御かたよりひこりこみきつせいもちひなど奉り給

へり(源さあき)九 十なまめれたるひこりこどもかけ物をささましくあて

ひこれ (源 檜柱) 廿柱のひわれたるもさまよりうぐいのさけしておしいれ給ふ(夫)

十七 「湊いづるかこれともぶねゆそれともひこれもやらぬあさ氷りな

仲正 **ひわづ** わ 眞淵(源 檜柱) 十。ヒゲ黒ノ北 いとさ、やりある人のつね此御をやみ

やせおどろへひこつあて髪いとけうらよてながりけるがさけとりたるやうはお

ちやそりてけづることをもささしくしたまひせ云々(同 かしは木) 十。女三初産みや

いささりりひこづなる御さまよていとむくつけうならぬ事のおそろしうおやさ

れけるよ御湯をとも聞しめさき(同 竹川) 卅源侍従とていところうひこづなりとみ

い宰相の中將よて匂ふやかをるやと聞よくめてささがるを

ひがいらへ (空穂 國讓) 五 卅 やんことをさき事とも申されつれどひがいらへをなん

てまうできぬる

ひりへ 字彙叩與扣同扣牽馬也史記伯夷叔齊叩馬諫曰ノ叩チヒカヘトヨミナシタル

アハセナルサマノヲチイヒ又ウツ(宇治拾) 廿四 ことくどもをばよくをへへり

侍りけるあなさけかくて入りまればつとめてつうへりける(榮 もとの車) 四 殿杖

よか、らせ給ひてよろび人ひりへたてまつりつれどえおそしまらねば(落

窪) 三 かのもの給ひ一夜ひりへたりけるこの君かりけり(狹) 一ノ上 いとむづり

くておりあんとすればひりへてなどいらへをたましたまぬ(源 横笛) 六十三の宮わ

が大將をやとてひりへ給へり(宇治拾) 十一 生死よるてんをるいせんをる所煩惱まひ

りへられて今ふりくてもうき世を出やらぬあこそ(同) 九 このおそしまは人よらせ給

へもの申さんといへば何事より侍らんとていざりよりたるを何のさりりもなけれ

バふといりきてひりへつ(源紅葉賀)廿この君をいりましな一聞えぬるありとこび
しさまふるふくつとひりへたり(宇治拾)八二いりまし侍らんぞるといへばその
ひりへたるもの四卷經書たてまつらんといふ願をおこせとみそりまいへば(源紅
葉賀)三廿二づらそしさまとてたち給ふをひりへて詞云々爾(著聞)一ノもいとのと
みま布こりなびいりまと思ひ候へばひりへて候御ゆるしあるまづく候と申させ給
ひけり(新千)誹諧「露ふりきををなが袖をひりへつなくく秋をどめつるり
な(兼盛集)鈎舟つりをたれて海の上ひりへたり

ひりり光(狹)二下帝大將おどゞのそをのみたぐひなれひりりと思ひ給へるま
や若みりくたがそぬさまなる人も出されるものをとて(後)春下やよひ月あると
司めしの頃申ふまよをへて左大臣家まつりいしける歌云々かへ「つねよりものど
けかるべき春をればひりりま人のあそざらめや(源幻)廿御りたちむりし此御光
まよ又おやくそひて有がさくめでたくみえ給ふを(同)夕かほ四今あんあみた佛の
御ひりりもこゝろきよくまたれ侍るべき(同)てあらひ五十いとおぞえせうれしき
山ざとのひりりとあけくれみ奉りつるものを(同)竹川四十けふのひりりとさうト
奉り給ひけれどおとしまきせ(同)桐つは二十目もみえ侍らぬまかしこき仰せを

光りよてかんとて見給ふ(同)あふひ九上達部いことなるを一所の御ひりりま
とおしけたれためり(同)御法十紫上まことよいふりひなくなりさてさせ給ひて
のちのみぐしさりりをやつさせ給ひてもことなるりのよれ御ひりりともおらせ給
いざらん物りら云々(源花の宴)四りうやうの折まもまづこのきみを光し給へば
(同)玉葛九今すこしひりりみせんや云々右近りへけてそこよ(同)柏木六か
る咎をいられ奉てよまがらへんことよいとまをゆくおぞゆるのけまことなる御
ひりりなるべし威光也爾(新古)雜上「てる月も雲れよまぞ行めぐる花ぞ此世
のひりりかりける(尾張家苞)光の漢文よて光輝と云此世のそれよなるものとい
ふ義

ひりる(竹取)もと光る竹ひとそぢありけり(源さかき)四ひたきやうをりま光りて
(同)盤六よそりよりくけちえんま光れるま
びぐさ(源)東や七五十ゆめをこがましくひぐさすまどうをとはへるみてのたま
へ

ひがりぞへ(源)わかな上ノいとわりくきよらよてかく御賀をといふことひひが
ぞへまよとおぞゆるさまのまめりく人のおやけかくおとしますを

ひがよみ(空穂 藏開)中 大將見合給ひておもひやみよしのと心うちささげをさづむ
とひがよみをおろくべきと點一つもよとあやまたぬを

ひうた(夫)十七家長 「ひうたふくうら風さむと水ぐれの岡此みなどよちどりかくなり

(同)同 公朝 「ひうたふくうらかせさえてみづぐれのをりのみなどよちどりかくなり

(新續古)雜中稱名院 入道内大臣 「入日さししせれあみのをえされてひうたよちうら

のそつたま(万)七ノ廿一 「あまぎらひひうたふくらと水ぐきのをり此みかどよ浪たち

きたる(續古)春上 後鳥羽院 「志不がまれ浦のひうたのあけすの霞あのところうたよ

の松(玉葉)雜二 時綱 「みつしよよ浦のひうたもなみあえてそらよれこゆるあしたづの

こゑ(續千)雜上 範秀 「みつしよれうらのひうたのみえこりて浪よりうへよたつ千鳥り

か(新後拾)秋下 御製 「ゆふしよのさしよつれし影ながらひうたよのこるあきのよれ

月

(ひうれて)源末つむ 廿おとよ夜よいりてまりて給ふよひうれ奉りて大殿よおそ

ましぬ(同)胡蝶 十内のおおいどの君たち此君あひうれてよろづよけしきさみ

こびありくを(同)竹川 六をりしよのあそび所よ君たちあひうれて見え給ふ時々あ

り(同)浮舟 廿れいにくらしがたくのみ霞める山ぎをながめこび給ふあくれゆく

ひこびしくのみおろしいらる人よひうれ奉りていとさうかうくれぬ(同)紅葉賀

五 かんたちめみなさるべきかぎりのよろこびし給ふも此君あひうれ給へるなれば

(瀨松)六 契りをむすび聞えさせける縁のふりりけるよひうれて(源すま)卅時あ

ひかれて入ぬべりりけり(同)松風 九さりとまかうつたなき身あひうれて山がつの

いりりあいまどり給えと(同)廿 此すきものども此尋ねきていといたうとひと

めしよひりされて(拾)春 能宣 「ちとせまでかたれる松もけふより君あひうれて万

代やへん

ひがん(蜻蛉日記)中 一月も十四日よありぬ 云々ひがんあ入ぬれば〇契沖云物ニ見

エタルハ是初メカ(源)をどめ 五十 四 ひがんのころあひわたり給ふ(同)行幸 廿十六日

ひがんのそとめよていとよき日なりけり

ひがむ(御室撰哥合)五十二番 みやまぎれおのれがふしのいやしれもあらぬい

よひがむなるべきと能因法師がつろうまつれりしあおもひあそせられをうりくや

侍らん 云々(源さのき)五十 いとよ老の御ひがみさへそひよたれば(うつ)藏開 上

八 藤中納言ひがみたるやうなりかそらけとりてまかでんとて(同)嵯峨院 四十つた

あき人よつき給へりとして親をかうと奉りなんひがみたるやうなる(同)九十 御と

もとてたびく中納言をめすよまゐり給もんともかければ云々世あらん人の
あざみざらんやひがきてなほ仰せられたり(源若紫)八きこゝめひがめたること
などや侍らん(同)九うれたる聲のいとうききひがめるもあはれ(落く)四
とりもづいておちくぞといひたらんあよりひがみたらんといへ(源すま)九鹿を
馬といひけん人のひがめるやうひ
○ひがみコハハ年ヨ源手ならひ六十。紀守大尼いどこよあくこそひがみ給よけ
れあそれおも侍るりなのこりなき御さまをみたてまつることかたくて云々

○補老のひがみおノ部ニ出ス

ひがおぞえ(枕)一ノ村上ノ御古今かうかりと心得させ給ふもをかきものゝひ
がおぞえもい忘れたるあさもあらばいみどかるべき事とわりなくおぞいみたれぬ
べ(源)上七よくこのよの外のやうなるひがおぞえどもよとりませつゝあ
やいさむりゝの事ども出まうできつらんや

ひがく(仲正集)

「くれあけりあゝのひがくゝとりのけよ月をいとふと人もこそ
見れ(方丈記)南あかりのひがくゝをさゝ出して竹のそれこそし

補日くけの糸(新千)

冬公宗母 「ふけよけり山あはれ袖は風さえてひかけの糸も露

むすぶまで(玉葉)戀五(万代)戀五 いひたえよける女よ五節のころひりけのいとをどけ
てとらんとて顯綱朝臣 「おもへどもひりけのいとをくりかへしたえよふゝのつらく
もあるりな

日くけのかづら(万)

十四廿五 「あゝ引の山かづらけまゝをよもえがたけりけをおき

やからさん〇同十九ニ日くけかづらトイフニオナシク日蔭蔓ナリ然ルヲ日ヲ畧キ
テかけトノミイヘルハ卷十三ニうぎの山影トイヘルガゴトシ又コレヲ山かづらト
ノミモイフハ古今六帖ニ三室の山は山かづらせん古今集ニあかしの山の山人と人
もみるりよ山かづらせよトアリ是ナリ(延喜式)七 踐祚大嘗祭内親王及命婦已下女
孺以上青摺紅垂紐親王以下女孺以上皆日蔭髪(新古)賀部輔親 「ありねさを朝日の里は
ひりけ草豊のありりのかざりなるべし東野州聞書日りけの苔をいふなり神樂の

時神人りざいみせる物也(和名)廿二 苔類 蘿唐韻云蘿魯阿反日本紀私女蘿也補一其
之集) 「こけかかくおふるいとをれはひさゝさを君よくらべん心やあるらん是も日蔭なる

し(助無智秘抄)小忌ナキル日蔭ナカクタマシコケナリ

ひりけのいも(源をとめ)四うけていへばけふのことゝぞおもゆる日くけのいも
のそであとけいも〇大嘗會のとき小忌衣さる人ひりけのいとを冠よ下るかり日く

けのくみともいふかりとぞ

補 ひりけ草

(續古)冬

賈季

「けふあふとよれありり此日影ぐさいづれの代よりか

けはトめけん(續後拾)

戀四道綱母

「かけてみー末もたえよー日影草あふよそへてけ

ふ結ぶらん

○補 日蔭の雪

(新後撰)冬

親世

「おあつくハ日け此雪よさえぬまをみせそやと此

と人ぞまさるゝ

かへー

「みせそやとまつらんとてぞいそ花つる日影の雪れあど

とづねて

ひがこと(堀次)

池忠房

(夫)廿三

「いせからさひがことぞとやおもそまー大和なるてふ

みまさうれいけ(源薄雲)

冊四

今そこーひがこともあ給ひつべけれともいとうたてと

おぞいさるもことわりあ

云々

(同竹川)

冊二

そ花よー夜のそりなかりーあそびもおも

ひ出られけれバひがことあつて

涙ぐみけり

(同わかし)

文三十

云々夢の中ある

心ちのみしてさめそてぬ

どいりよ

ひが言おそからんとそこりどかくり死みた

り給へるーもぞ云々

(うつろ)

樓の上)

下ノ

冊十三

云々あどの給ふさまのいとめでたうかぎ

りお死人の御けそひあもりよ

ひたれバ

いとまめやりある御心すこーひがこともさ

こえつべけれとあるま

トくびん

お死こと、おもひりへー給ひつ(源わか紫)七ひが

ことき、給へるなん(宇治拾)

十

あどりくハいふぞたゞこといへどもひが事よて

こそ候らめ

廣足云是ハ

間違と

ひが心(源わか紫)

上ハ

八

さらバひが心よて我身をさーもあるまトきさまよあこがら

ー給ふと中頃おもひたゞよ

それー事

ひがこゝろえ(源薄雲)

冊三

またき聞えバまたひが心え給ふべけれと此給ふ(同

みゆき)

廿

ひが心えをーつ、かたる筋といおもひよらざりけり

ひりされて(源東や)

冊四

い死バひりされて(同わか紫)廿やがて御おくりつらう

まつらんと申給へバさーも

おぞさね

ひりされてまうで給ふ(同わか紫)四十五

トウ、りける御契あひり

されて

これも世よえあるまトきかり(元輔集)十一谷ふ

りくーづむたとひり

さきて

老ぬる松ハ人も手ふれぞ(後拾)戀一西宮「さりど

もと思ふ心よひり

されて

いま、で世よもふる我身哉(和泉式部集)「ふる澤田み

そぐくれのまこも草さ

のふあやめ

ひりされはけり(散木)「花みんとおもふ心あ

ひりされてをがるく

もか死

のするりあ(源わか紫)上ノ

りされてとおぞーの給

そす(更科日記)

えさら

をいた

たつる

よひり

されて

ひがぎ(源藤袴)

冊九

年比りくてそく、み聞え給ひける御心ざーをひがさまよこそ

人の申をかれ(蜻蛉日記)中よまかくてやみ給ふやうのあらトかどひがさまよおもひかしてふやあらんといふ

ひがき(源ゆふ顔)初此家の傍ひがきといふものあたらしうして(枕)八ノ大

夫權守かといふ人の板屋せさき家もたりて又小檜垣をかあたらしうして(備)今昔檜

垣ふたちをひたるものひそりふよべ(弁乳母集)うれたる木此ひがきといふもの

よそひてたてりけるを云々(宇治拾)二下人ともよびて中の檜垣をさゞこぢあ

こぢあて(今昔)さゞ大なる家の檜垣がくささまそさるあり(同)ひがきしてお

してたる門の家あり(著聞)九ノ檜垣より隣へこしてわが身もともおにけふけり

(夫)卅一「心あるやどれとかりの中ひがきふみれりよひのまさまやのかき(頼政集)

一立そとぬ時のまぞなれこぎもこが聲へたてぬ中此ひがきを

ひが耳(源寄生)四十志のびてのよゆるべうおぢれことも有けるがうれしきひが

みゝりと聞えさせんとぞ(同)あかし(十)山おりのひがみよ松風をきいたし侍る

よやあらん(とりりへそや)一このそりなき人よをへおき侍りよたがをせひさ

とりたると覺え侍るの山伏のよりの、峯の山おろしよ耳ならして侍るひが耳よ(源若紫)十

六あやひがみよやとたざるを

ひがく(落窪)四此ことからせともこたり給へとあらんのおをまどくやあ

らんあかひがくといひてこたし奉りつ(源東)十の心ざしのことよおもひ

まどめ給へらんよ引たがへらんひがく(糸)ちけたるやうよとりあす人もあ

らん(同)玉葛(三)四十着たる物の人のさまよ似ぬひがく(糸)もありくとの給へ

バ(同)あけまき(九)四十姫君の御心をあやしくひがく(糸)もてな給ふともどきく

ちひをみきこゆ(同)若紫(五)さる海づらよ出るたるひがく(糸)やうかれど(同)わ

かな(下)十ひがく(糸)きこえあす人ありともゆめ心おき給ふ(同)末つむ(三)十君

のかくまめやかよの給ふあきいれざらんもひがく(糸)かるべ(同)見かな(下)卅七

年頃かきうもれてまぢれよ耳などもまこひがく(糸)むくかりよたるふやあらんく

ちをしろかん(同)季吟云源ノカク世ニマシラセ玉ハ耳モヒガミテ此女樂ヲヨク

聞玉フニヤロナシキコトナリ(源若紫)四出たちもまべりける人の世此ひがものよてまどらひもせ

ひがもの(源わら紫)四出たちもまべりける人の世此ひがものよてまどらひもせ

ぎ(同)ととめ(二)十世のひがものよてさえのそよりの用ゐられせすけなくて身まづ

いくかんありけるを

ひかき(詞花)上おそやけの御りこまりあて侍りけるを僧正源覺申ゆるして侍り

